

2018 年度

青山学院高等部 SGH 事業報告書



青山学院高等部

SGH 委員会

はじめに

部長 渡辺 健

青山学院は、キリスト教信仰に基づく歩みの中で「愛と奉仕の精神をもって、すべての人と社会に対する責任を進んで果たす人間の形成を目的とする」という教育目標を掲げてきました。この教育目標を達成すべく、本校は研究開発構想を**多様性の受容を基盤とする「サーバントマインド」を持つグローバルリーダーの育成**としています。グローバル化された社会において、多様性を受け入れ、国家や文化の差異を超えて平和を実現する人物、困難な状況下にある人々に寄り添って奉仕することのできる人物を育成することが、青山学院高等部の目指すところです。

本校は今年で SGH 指定 4 年目を迎えましたが、昨年度以来 SGH 活動が生徒間に、また教員間においても定着し、生徒の積極的なプログラムへの参加や意識の高まりにつながってきているように感じています。この意義の共有が上に掲げた本校の目指す教育の具現化に直接的に貢献していることも、実感しています。また今年度は、グローバルウィークなどの中心的な企画が、内容や準備・運営方法の改善を図りつつ、より意味のあるプログラムへと進化を遂げ、SGH に指定いただいた意義がさらに深まってきたと感じております。特に、グローバルショーケースと題し、複数のグループがエントランスホールで同時に発表し、他の生徒たちが自発的にそれぞれ興味のある発表を聞くことができるように設定した企画は多くの生徒の関心を引くこととなり、発表者のプレゼンテーション力の向上と他生徒への啓発・波及という点で、大きな意味のあるプログラムとなりました。

また平和共生論文の仕上がりも年々向上しています。論文の意義、テーマの選び方、構成、論理的な文章の書き方などの指導もシステム化し、生徒が論文に取り組みやすくなっていると思われます。さらなる改善が期待できる課題としては、生徒が仕上げた論文の効率的かつ効果的な評価方法の確立と、青山学院大学との連携を強めることがあげられます。

今後は、これらの発表機会や論文の執筆を新学習指導要領が謳う探究学習の中心に位置づけることなどを検討しており、さらなる成果へとつなげていきたいと思っております。

SGH 指定最終年度となる来年度は、これまでの取り組みを今一度精査しながら持続可能なプログラムとして確立し、生徒一人ひとりが他者を受け入れ、人に仕える心を持ったグローバルリーダーへと育ていけるよう体制をつくってまいります。

目次

はじめに	1
平成 30 年度 SGH 研究開発完了報告	4
【取り組みについて】	12
1. 全校対象プログラム	
SGH オリエンテーション	12
平和共生 LogBook	14
修学旅行	16
平和共生論文	18
グローバルウィーク I&II	20
グローバルウィーク中に実施された特設プログラム	29
2. 平和共生	
生徒自主学習団体ブルーペコによるフェアトレード活動	33
東日本大震災被災地 岩手県宮古市との交流	37
フィリピン訪問プログラム	42
3. 国際交流	
都内アテンドプログラム	46
カナダホームステイプログラム	49
English Camp(多文化共生キャンプ)	53
短期交換留学プログラム	56
イタリア レニャーニ校	56
イギリス リーススクール	59
チャットルーム	63
青山学院大学との高大連携プログラムと大使館レクチャー	67
青山学院大学協定校留学に関する総合オリエンテーション	68

カナダ大使館講座.....	70
東ティモール大使館講座.....	72
【2019 年度の展開】	74
英語力の推移.....	76
全校生徒対象アンケート.....	79
【関係資料】	87
平成 30 年度教育課程表	87
平和共生委員会通信「ともしび」.....	88



(別紙様式 3)

2019 年 3 月 29 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都渋谷区渋谷 4-4-25
管理機関名 学校法人 青山学院
代表者名 理事長 堀田 宣彌 印

平成 30 年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成 30 年 4 月 1 日(契約締結日)～平成 31 年 3 月 31 日

2 指定校名

学校名：青山学院高等部

学校長名(部長名)：渡辺 健

3 研究開発名

多様性の受容を基盤とした「サーバントマインド」を持つグローバルリーダーの育成

4 研究開発概要

- e ポートフォリオのプロトタイプと位置づけ、「サーバントマインド・平和共生」をテーマに全教科を横断して繋ぐファイル「平和共生 LogBook」を、各生徒が 3 年間保持し、思索活動の起点とする。

- カナダホームステイや海外提携校とのプログラムにおいて、現地の人たちと共同で行うリサーチ課題やインタビューを通し、各自で設定した課題に取り組む。
- 多文化共生キャンプや世界各地から青山学院大学に集まる留学生との多言語セッション、近隣大使館との連携などを通して、高い英語コミュニケーション能力を養うとともに、世界の課題に目を向ける機会とする。
- 海外提携校の生徒や青山学院大学に集まる留学生とともに都内を歩いて、都心開発の歴史、オリンピック・パラリンピック開催地としての利点や問題点などについて討議する「都内アテンドツアー」を開催する。
- フィリピンや東ティモールへの訪問、東日本大震災の被災地宮古市の高校との交流を通し、他者とともに生きる視点を養う。
- これらの学びを全校型のセッションであるグローバルウィークを通じて、全体で共有する。その学びや気づきを平和共生 LogBook を経由して個々の生徒の平和共生論文の執筆へと繋げる。

5 管理機関の取組・支援実績

(1)実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
経理事務の管理	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
SGH事業推進のための 事務職員雇用の継続	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
成果普及 (SGHフォーラム、甲子園など)						○			○			○
青山学院大学との 高大連携の充実推進	○	○	○				○	○		○	○	○
NPOやNGO団体と連携した学習支援			○		○		○	○	○			○
SGH専用HP 活動報告会開催等の支援	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運営指導委員会									○			○

(2)実績の説明

- 高等部事務室にて SGH 専用事務職員 1 名の雇用を継続した。
- 成果の普及を促進するため、SGH 専用ホームページの逐次更新を実施した。そのためのサーバーを管理機関が提供した。
- 青山学院大学が契約している CMS ソフトウェアの CoursePower を、学院の包括ライセンスとして高等部での活用も可能とし、SGH 専用 HP と組み合わせ「SGH ポータル」とした。
- 青山学院大学との高大連携促進活動として、下記の機会を提供、または提供のための準備を進めている。

- 青山学院国際センターを通して、高等部で行われる多言語セッション(チャットルーム)に年間を通して協定海外大学からの留学生をリーダーとして招聘した。青山学院大学に進学した際の協定校留学参加を促進するために、オリエンテーション、IELTS 講座を開催した。また、高等部が希望する在日大使館に、高等部内での講座の開催を要請した。
- 青山学院宗教センターを通して、認定 NPO 法人 チャイルド・フアンド・ジャパンにフィリピン訪問プログラムの開催を依頼した。
- 昨年度新たに開設した青山学院大学ボランティアセンターおよびアカデミックライティングセンターに、高等部での SGH 活動のサポートを依頼。現在、方策に関する打ち合わせを行っている。
- 2018 年 12 月 1 日および 2019 年 3 月 15 日に運営指導委員会を開催し、委員の先生方の専門的見地からグローバル教育の在り方について指導・助言をいただいた。

6 研究開発の実績

(1)実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
SGHオリエンテーション	○											
平和共生LogBookを用いた活動	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
平和共生論文	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
グローバルウィーク I・II			○				○					
平和共生関連プログラム (東ティモール、宮古、フィリピン)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
都内アテンドプログラム						○	○					○
カナダホームステイプログラム				○	○							
English Camp(多文化共生キャンプ)					○							
短期交換留学プログラム						○	○	○		○		○
Chat Room	○	○	○	○		○	○	○				
高大連携プログラム	○	○	○				○	○		○	○	○

(2)実績の説明

◆ 平和共生 LogBook・論文

本校では3年間にわたる教科学習および課外活動の中から、「平和」「共生」という概念につながる箇所を各教科が抽出し、課題として生徒に課している。生徒はそれらの課題を「LogBook」というシステムファイルにとじ込み、ポートフォリオとして蓄積していく。

本年度も下記を実施した。

国語総合	『沈黙』を読み、迫害という概念への理解を深めた(1年生)。
現代史	現代国語と現代史が協働し、ホロコーストを多面的に学習した。ナチスの民族観を批判し、感想を記載(1～2年)。原爆開発の歴史を検証、気づいたことを記載した(2年生)。
現代社会	平和憲法についての政府見解の変遷と、解釈についての考察を行った(2年生)。
生物基礎	東海村の原発事故について学習をおこなった(1年生)。
物理基礎	原子力と放射線、核の平和利用について学んだことを記載した(2年生)。
コミュニケーション 英語	映画「Invictus」を観て、南アフリカにおける差別問題とスポーツによる共生について論じた(1年生)。 ホロコースト時にユダヤ人救済に尽力した人の話を読み、その行為や動機について論じた(2年生)。
夏休みの宿題	身近な人の戦争体験をインタビューし、まとめを記載した(2年生)(コミュニケーション英語の授業において1人ずつ各自が英語でプレゼンテーションを行った。)
修学旅行関連	長崎原爆資料館訪問報告、平和講話(被爆体験)を聞いての感想記載した(2年生)。映画「ヒロシマ・ナガサキ」を観たフィードバックを記載した(1年生)。
平和共生論文 執筆指導	課題の見つけ方、論の展開、引用法、章立ての仕方などを指導する生徒集会を開催した。

➤ 平和共生論文を用いた活動

3年の4月に全員が6000字以上の「平和共生論文」を提出した。その後、SGHポータル CoursePower に全員の論文をアップし、共有した。お互いがコメントしあったり、同一テーマを扱った者がグループを作り、ディスカッションを行ったりして、内容に関する理解を深めた。クラス代表を選出し、SGH 成果報告会でプレゼンテーションを行った。

◆ グローバルウィーク

➤ グローバルウィークⅠ：6月18日～25日 <全校対象>

「共生～Our Neighbors(隣人)～」をテーマとして、期間中の礼拝の奨励、昼休みと放課後にセッションやワークショップを行った。主体的に学習を行う生徒の団体が、集まった生徒にパワーポイントを使って活動を紹介するセッションや、ポスターセッションを昼休みに行い、多くの生徒が足を止めて学びを共有した。

➤ グローバルウィークⅡ：10月1日～5日 <全校対象>

「Get Connected～コミュニティ再生～」個々が繋がって形成されるのが「コミュニティ」である。構成しているメンバーシップに焦点を当てたセッションやワークショップを多く開催した。国家をメンバーとした国際コミュニティの在り方や、メンバーが自立した個であることの大切さを知る機会を共有する機会となった。

◆ 平和共生関連プログラム

➤ 宮古訪問プログラム：8月2日～5日 <参加生徒14名>

現地スタッフから防災について学んだ後、宮古北高校の生徒とともに被災の記憶の風化について様々な学びを行った。(後日、宮古北高校の生徒会メンバーを本校の文化祭に招待した。) 海産物の加工所を見学し、販売を通じた支援について考える機会を持った。

➤ 東ティモールスタディツアー：8月5日～12日 <参加生徒4名>

特定非営利活動法人 ピースウィンズ・ジャパンの案内で山村の農家を訪問し、密着インタビューを実施。地元の小学校を訪ね、識字率向上の補助として、手作りのオリジナルカルタを寄贈した。特定非営利活動法人 ケア・インターナショナルのディリ事務所を訪問、同団体の行うコミュニティ・エンパワーメント活動に同行した。

➤ フィリピン訪問プログラム：3月21日～26日 <参加生徒8名>

青山学院初等部・中等部・高等部・大学から集まったメンバーが認定 NPO 法人チャイルド・ファンド・ジャパン現地スタッフの案内で、それぞれが支援しているスポンサーチャイルドと会った。人々が「学び」の中で自分自身を価値ある存在として見出し、自覚と自負をもってコミュニティの中心的存在となっていく過程を学んだ。背後にある社会問題にも多くの気づきを得た。

◆ 国際交流関連プログラム

➤ カナダホームステイプログラム：7月26日～8月8日 <参加生徒29名>

参加者は多様な民族からなる異なる家族のもとにステイし、交流やインタビュー活動を通してカナダの多様性に触れることができた。

➤ 短期交換留学プログラム

英国リーススクール <参加生徒6名>、イタリア レニャーニ校 <参加生徒12名>

2週間ずつの滞在と学校生活を体験した。各自のテーマを設定し、現地提携校でのインタビューやディスカッションを通して学び合う機会を持った。グループごとに設定したテーマは「宗教観」「しつけ・家族のルール」「音楽をどう生活に用いるか」「ことわざと言い伝え」など。事前に日本、イタリアの双方で行ったアンケートも有効であった。帰国後、プレゼンテ

ーションを行った。

➤ 都内アテンドプログラム：3月31日 <参加生徒14名>

青山学院大学相模原キャンパスよりタイ、ベトナムの留学生を招き、本校生徒がともに渋谷一原宿地区を歩いた。今回は東京オリンピック・パラリンピックに向けて、観光都市である渋谷原宿エリアがどうあるべきかをテーマに、KJ法を用いてディスカッションをおこなった。「異なる文化背景を持った外国人から見た渋谷」「歩行や視覚における障がいのある方から見た渋谷」など、グループごとに視点を割り当てて、振り返りを行った。

➤ English Camp(多文化共生キャンプ)：8月27日～29日 <参加生徒16名>

本校の軽井沢追分寮にて、青山学院大学に在籍している留学生・本校に在籍している留学生を交え、マイクロプラスチックの問題に焦点を当ててグループワークやディスカッションを実施した。フェアトレードを題材にしたシュミレーションゲームを行った。期間中の会話・議論はすべて英語を用いた。

◆ 高大連携プログラム

➤ 大使館講座：1月15日・16日 <参加生徒のべ90名>

カナダ大使館より書記官をお招きし、「共生社会の実現」についてご講演いただいた。また、東ティモール大使館より全権大使をお招きし、「東ティモールの描く未来」についてご講演いただいた。

➤ 協定校留学オリエンテーション：1月9日 <参加生徒88名>

協定校留学プログラムの説明、体験談を聞いた。その後、資格となるIELTSのデモレッスンを受けた。

➤ IELTS 特別講座：2月22日～28日 <参加生徒40名>

IELTSの講師を招き、3年生を対象として実施した。

◆ 事業の評価

校内においては管理職とSGH委員会のメンバーを中心に、各事業の運営・評価・検証を行った。また、「グローバル社会・学習者としての自己認識に関する調査」として全校生徒対象のアンケート調査を実施し、教員にもSGHプログラムに関するアンケート調査を行った。客観評価としてはSGH運営指導委員会を開催し、事業内容を説明し指導を受けた。

◆ 報告書の作成

今年度のスーパーグローバルハイスクール研究活動の内容と成果をまとめた「2018年度青山学院高等部SGH事業報告書」を作成し、全国のSGH指定校や第3支部加盟校に配布した。

◆ SGH成果報告会の開催

2018年12月1日に他の指定校や保護者をはじめとする学校関係者を招き、本

校 PS 講堂で SGH 成果報告会を開催した。

◆ 成果の広報・普及事業の展開

- グローバルフェスタ JAPAN2018 : 9 月 29・30 日
お台場にて開催された、国内最大級の国際協力イベント。本校の実施するプログラムに参加した生徒が、連携した NGO・NPO 団体の手伝いとプレゼンテーションを担当した。
- 青山学院高等部 SGH 成果報告会 : 12 月 1 日 <発表生徒 20 名>
- SGH 全国高校生フォーラム : 12 月 15 日 <参加生徒 4 名> 東京国際フォーラムにて開催。
- SGH 甲子園 : 3 月 23 日 <参加生徒 4 名> 関西学院大学にて開催。
- 生徒自主学習団体ブルーペコ「東ティモールでの学び」発表会 : 12 月 7 日
ケア・インターナショナルの「東ティモール訪問報告会」において。
- 青山学院広報誌『青山学報』、高等部便り、平和共生委員会通信「ともしび」を発行した。
- フィリピン訪問プログラム参加生徒による「SGH 出前セッション」 : 3 月 1 日
<参加生徒 4 名> 青山学院初等部 5 年生の英語クラスにて 4 回実施した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

指定 3 年目であった前年度の中間評価をうけての反省に始まり、指定最終年度につながる意味合いの一年間となった。

「個々の取り組みの関連性が読み取りにくい」という指摘をいただいた。基本姿勢としては、キリスト教信仰に基づく「共生社会の実現」に向けて生徒が個々に課題を見つけ出し、仮説を立てて資料を集め、論文を書き上げていくことを一つの到達点としているために、取り組みへの参加も生徒の主体性に任せている部分がある。興味のあるものにできるだけ参加して、課題に対して向き合う姿勢を醸成していくというやり方である。

さらに「共生社会の実現」のために、仲間の書いた論文を読んだり代表生徒のプレゼンテーションを聞いたりすることで、共感を得て視野が広がっていく。SGH オリエンテーションやグローバルウィークを共に過ごすことが「自分の考えのヒントになった」と答えた生徒がこの 3 年間で 37%から 50%にまで上昇していることにも、成果の一端を伺うことができる。その結果、「自分の将来像に社会貢献が関係する」と答えた生徒がやはりこの 3 年間で 61%から 64%に上昇してきた。「グローバル社会で活躍することに興味が増した」生徒も 56%から 63%へとそれぞれ着実に伸びてきている。さらには、貧困の問題、自己のアイデンティティの問題などの社会問題に対する意識も上昇しているのは、本校のプログラムの成果であるといえる。学校による大きなものの見方の提示と、様々な体験をした仲間の主張・発表

を受けて、生徒個人の中で自己と周囲の社会との関連性が形成されていくものと考えられることもできる。

「国際活動の成果が限定的」という指摘もいただいた。スタディツアーに出かけた生徒は少数であるが、彼ら・彼女らが経験した探究学習は教育関係者や大学の教授の方々からも称賛を得ており、すでに大学での学びのレベルに十分達している者も多い。この生徒たちに触発されて自己の探究の道を選び始める仲間が多くいるという点に注目して評価していただければ幸いである。

本年度実施した教員に向けてのアンケートでは、SGH 活動に積極的な姿勢を示す教員の数が若干減少傾向にあった。これは学校規模での方法論がある程度定着してきたことで、目新しい取り組みを必要としない安定状態に入ったことの表れとも考えられる。このことは、テーマの設定や取り組みの完成度を評価している教員が増えていることにより裏付けされる。ここ 4 年間の SGH の活動が着実に校風に馴染んできたと結論づけることができるだろう。「SGH 導入後の生徒の姿勢の変化」に関する回答も、3 年前には 58%であったのに対して本年度は 74%へと上昇している。

8 次年度以降の課題及び改善点

来年度から始まる「総合的な探究の時間」への、無理のない接続をひとつの目標に掲げてきた。全校型の大枠の中で、全員が自分で課題を設定し取り組んでいく文化が定着してきたので、次年度をその仕上げに充てることができる。

一人一人が個人のものとして注目した課題を中心に、日ごろの SGH 活動の中に豊富に盛り込まれた探究要素を用いて学びを深め、「平和共生論文」へとつなげていく。また、青山学院大学のサービスラーニングセンターと連携して、実際に生徒が学びに向かう体験をする機会を増やしていく。「心が動く」学びを体験する機会とその振り返りを経て、学問的思考を使って課題の解決を模索することを学んでいく。その生徒が抱いた探究マインドを大学での学びに効果的につなげていく方法を具体的に考えていくことが喫緊の課題である。

この総合的な探究、サービスラーニングの関連がうまく形成されれば、指定が解除される次年度以降に、本校の学びは間違いなく新しい形をとることができると思う。

【担当者】

担当課	青山学院高等部	T E L	03-3409-3880
氏 名	藤井 徹也	F A X	03-3409-5784
職 名	SGH 委員・英語科教諭	e-mail	tefujii@aoyamagakuin.jp

【SGH オリエンテーション】

活動概要

【日程・参加生徒】：2018 年 4 月 10 日 1 年生対象

2018 年 4 月 11 日 全校対象

【場所】：本校 PS 講堂

【担当】：渡辺健(部長)、堀内真美(公民科)、藤本晃弘(地理歴史科)、藤井徹也(英語科)

【目的】：

学年の始まりにあたり、本校が SGH として目指すものを全校生徒が確認する機会である。それぞれのプログラムが意図するところを意識したうえで、積極的な参加を促すことを目的とする。特に 1 年生には、グローバル化が意味するのは何か、それに対応するにはどのようなスキルが必要か、どのようにしてそれを獲得するのかについて理解してもらう。2, 3 年生を加えて行う全校オリエンテーションは、昨年度までの 3 年間で積み上げてきた学びを確認し、今年のスタートラインを認識することを目的として実施された。

【内容】：

- 1 年対象オリエンテーション
 - 本校で初めてキリスト教にふれる生徒を前提に、建学の精神を紹介。
 - グローバル化の時代における「他者のために仕えること」から始まる新しいグローバルリーダー像を提示。
 - グローバル化とはどのようなことを指すのか、公民科教諭によるレクチャー。
 - SGH 担当教員による本校の SGH プログラム全体像の紹介。SGH の意図の明確化と、それを具現化するプログラムの説明。
 - 生徒自主学习団体ブルーペコの元代表・副代表の卒業生(青山学院大学の学生)に SGH の活動の一つである「東ティモールスタディーツアー」から学んだ事と、それが大学での学びにどのようにつながっているかについて語ってもらった。
- 全校対象オリエンテーション
 - 昨年度行われたグローバルウィークの振り返り動画の上映。
 - 2017 年度春に実施されたフィリピン訪問プログラム参加生徒による実施報告と発表。
 - 昨年度の生徒の発表・活動の振り返り動画の上映。
 - 昨年度実施の全校アンケート結果をもとに見る高等部生のグローバル化に関する意識の推移についての報告。

【今後の課題と展望】:

SGH 指定の最終年度を迎えるにあたり、その学びが今後のカリキュラムにどのように合流していくのか、生徒が大学に進学するにはどのような能力を持つことが期待され、社会ではどう自分を発揮していけばよいのか等について、来年度より段階的にカリキュラムが変わっていくことを心に留め、それぞれの学年に向けて個別のヴィジョンを持たせたい。生徒たちには特に探究学習との関係をしっかりと理解させる必要があり、工夫が大切になる。変化していく教育の流れに、生徒一人一人が主人公であるという意識を持たせて合流できるよう、オリエンテーションを有効に使い、メッセージを発信していきたい。



【平和共生 LogBook】

◆各教科の取り組み

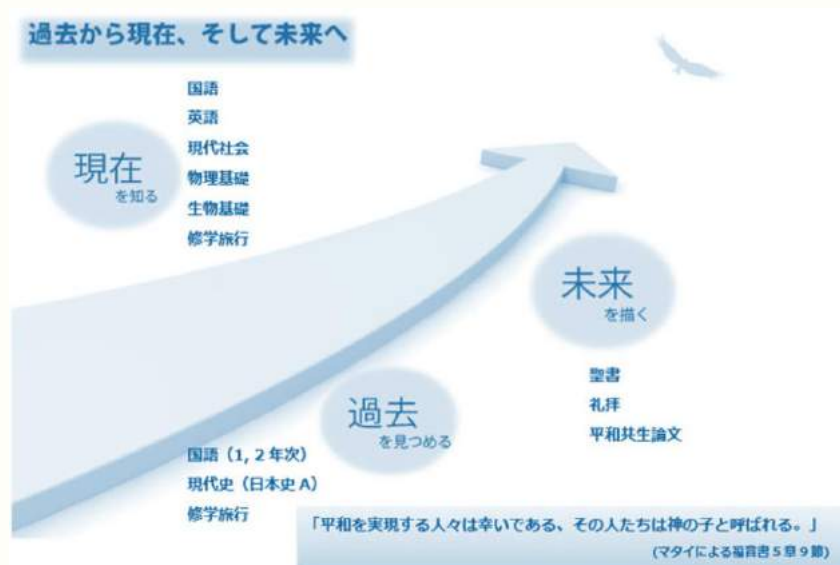
活動概要

【参加生徒】：全校生徒

【目的】：「多様性の受容を基盤とした、サーバントマインドを持つグローバルリーダーの育成」というテーマに関して各自がポートフォリオを作成していくことで学びを深める。

【内容】：

- 3年間の授業や礼拝、修学旅行など、様々な活動を通して平和と共生について学習する。平和共生 LogBook は生徒一人一人が学んできた足跡をファイルするポートフォリオの役割を果たす。
- 本校では教科学習のみならず、修学旅行をも有機的な学びの場ととらえ、訪問地や見学地に関わる題材を積極的に学ぶ機会を提供している。加えて、修学旅行の学びが一段落した2年次終盤に、自らの選択した平和・共生に関わる問題をテーマとした論文を執筆する作業に入る。その際に必要な考え方、資料検索の仕方なども、LogBook を通した活動の一部として学習していくことになっている。また、グローバルウィークの振り返りを書きとめる差し込みページが加わったことで、課題として生徒が選択できる範囲も広がり、LogBook の取り組み自体が深みを持つことになった。
- 4年目の今年度も、各自の作成したこのポートフォリオの中に見つけたトピックや疑問を元に、平和共生論文のアイディアマップを作成した生徒が多く見られた。有機的かつ発展的に LogBook が用いられていくことで、更なる学びの可能性を広げることが期待できる。



● 教科において取り扱う題材(一部抜粋)

教科	科目	時期	内容
聖書	聖書	1 年 3 学期	平和・共生の歩み「杉原千畝」から
		2 年 3 学期	平和・共生の歩み「内村鑑三」から
		3 年 2 学期	平和・共生の歩み「Martin Luther King Jr.」から
国語	2 年現代文	修学旅行前	林京子「空缶」(長崎原爆被爆者の話)
	3 年現代文	通年	平和・共生に関わる教材を担当者がそれぞれ扱う
地理 歴史	日本史 A (現代史)	2 学期	第二次世界大戦において、ユダヤ人はなぜ大量虐殺されたのか
		2 学期	原子爆弾開発の歴史・マンハッタン計画／長崎の原子爆弾被害
公民	現代社会	2 学期	平和憲法
理科	生物基礎	2 学期	NHK『被曝治療 83 日間の記録』
	物理基礎	修学旅行前	1998 年 NHK スペシャル『原爆投下 10 秒の衝撃』
		3 学期	原子力と放射線まとめプリント
		3 学期	原子力と核兵器の結びつき
		3 学期	原子力が抱える放射性物質の問題について調べる
		3 学期	NHK ドキュメント 『地下深く 永遠(とわ)に ～100,000 年後の安全～』
英語	コミュ英 I	1 年 3 学期	故ネルソンマンデラがラグビーワールドカップを通じて南アフリカにいかに関生をもたらしたか
	コミュ英 II	2 年 2 学期	ヒトラー政権下のポーランドでイレーネセンドラーがいかにユダヤ人の子供たちを救ったか
	コミュ英 III	3 年 1 学期	ベトナム戦争で戦死した男性とその恩師との物語
学年	個別作業	1 年春休み	遠藤周作「沈黙」(近世におけるキリシタン弾圧の話)
	学年集会	1 年 3 学期	NHK スペシャル「長崎・浦上の受難」
		2 年 1 学期	ド・ロ神父に関する話
	個別作業	2 年夏休み	身近な人の戦争体験を聞く、または地域の被害を調べる
	修学旅行中	旅行中	長崎で被爆体験者の講話を聴く
	修学旅行中	旅行中	長崎原爆資料館を訪ねる
	クラス別	2 学期末	論文作成資料の調べ方レクチャー(図書館)
	個別作業	2 年冬休み	平和・共生の論文のテーマを考える
全校	イベント	1 学期/2 学期	グローバルウィークへの参加
	総合	冬休み	礼拝を通して考えた自分の生き方について作文

【今後の課題と展望】

さらに多くの教科の参加を促し、教科横断的側面を強める。e ポートフォリオへの移行をスムーズに行う下地を作る。

◆修学旅行

活動概要

【報告者】：武藤拓(理科)

【日程】：2018年11月5日～9日、4泊5日

【参加生徒】：2年生全体 404名

【目的】：

九州の地理・文化やキリスト教の歴史などに関する学習に加え、現地での原爆資料館見学、被爆者の体験談講話など、平和について深く考える機会を持つ。また、多様性の受容と共生の問題を自分達の課題として取り組む姿勢を養う。

【訪問地】：西九州（福岡～長崎）

【内容】：

- 平和学習(原爆について学ぶ)。
- 現地のキリスト教との関わりを学ぶ(キリスト教弾圧の歴史から学ぶ)。
- 地域の自然環境や歴史的環境、文化を体験して理解する。
- コースは長崎を中心に西九州を回る。2016年の熊本地震の影響で2年間訪問していなかった熊本・阿蘇をコースに戻し、全クラスが震災で大きな被害を受けた熊本城を見学する。
- 潜伏キリシタン関連の世界遺産に登録された長崎県外海地区を全クラスが訪問する。
- 事前学習
 - ◇ 1年3学期 学年集会『原爆と沈黙～長崎浦上の受難～』視聴
 - ◇ 1年3学期 礼拝「長崎の原爆について」、「二十六聖人殉教について」
 - ◇ 1年生春休み 『沈黙』読書感想文
 - ◇ 2年1学期 学年集会 長崎の潜伏キリシタン関連遺産の映像視聴、ド・ロ神父に関する講話
 - ◇ 2年夏休み 身近な人の戦争体験を取材または身近な地域の戦争体験を調査
 - ◇ 2年10月 学年集会 活水高校平和学習部からのビデオメッセージを視聴
 - ◇ 各教科の授業でのプリント(課題)の実施
 - ◇ 平和共生 LogBook 資料の作成、ファイリング
- 具体的なコースはホームルーム毎に異なる。長崎市内の原爆資料館・平和祈念公園は全員が共通して訪れている。

◇ 日程例

- 1 日目：羽田空港—福岡空港—大宰府天満宮—柳川—吉野ヶ里遺跡—唐津(泊)
- 2 日目：九十九島パールシーリゾート—外海地区—長崎市内(泊)
- 3 日目：(長崎自主研修・原爆資料館・平和記念公園)—長崎市内(泊)
- 4 日目：軍艦島・高島クルーズ—フェリー(島原→熊本)—阿蘇(泊)
- 5 日目：熊本城—そば打ち体験(南阿蘇)—熊本空港—羽田空港

- 原爆資料館訪問でメモと感想を LogBook に記入し提出。
- 長崎滞在中に被爆者の講話を聴き、LogBook にまとめる。

【今後の課題と展望】：

今年は、震災の影響で訪れていなかった熊本・阿蘇への訪問を再開し、全クラスが地元ガイドの案内のもと熊本城を見学した。地震の被災地から学び得ることは多く、今後さらに深めていける余地もある。

これまでも見学地の1つとしてきた長崎県外海地区だが、今年は全クラス必須とした。外海地区が潜伏キリシタンの関連の世界遺産として登録され、この機会を活かすよう事前学習に力を入れたが、来年度以降も修学旅行の取り組み全体の中でどう位置づけていくかを丁寧に検討していきたい。

今年は長崎の活水高校とビデオレターを通じて交流を持った。活水高校は生徒が積極的に平和活動を行っており、今後は現地での直接の交流などさらに人的な交流を進められるとよい。



◆平和共生論文

活動概要

【参加生徒】：全校対象

【目的】：

平和・共生に関するテーマを自ら設定し、文献調査を行い、自分なりの仮説を立て、検証し、論文にまとめる作業を通して学びを深める。

【内容】：

- 2016 年度 3 年生(65 期)より、生徒全員が平和共生論文を執筆している。教科やその他の様々な分野における学習を「平和共生 LogBook」にまとめていく高等部の平和共生学習活動の一環として位置づけられているものである。2 年次に各自が興味を持った「平和・共生」に関わる様々なテーマへ目を向け、詳細な情報収集を行うことからはじめ、数カ月かけて論文を執筆している。

➤ 論文作成執筆日程

2017 年度 2 年生

7 月	平和共生論文・テーマ設定について説明
9 月	イメージマップを作りながら、テーマをしぼり、設定したものを提出
～11 月末	論文テーマの最終決定
10 月～11 月	HR 別図書館オリエンテーション(情報の集め方等)
1 月	「論文中間構想報告書」提出
2 月	論文執筆事前相談会 (代表生徒有志による体験談、個別相談)
2～3 月	各自研究をまとめ、論文執筆(6000 字以上)

2018 年度 3 年生

4 月	論文提出
5 月～ 夏休み	各 HR から 1 名ずつ選出された代表者が各テーマに応じた教科等の教員より助言を受け、再度、論文をまとめ上げる
2 学期	LHR を使い、グループで論文を読み合い、共有
11 月	論文集(10 名の代表論文と学年全員のタイトル集)を作成 3 学年全員に配布、また 1・2 年生 HR 教室に 1 冊ずつ配置
12 月	SGH 発表会において、HR 代表の中から 4 名がプレゼンテーションを行った(うち 1 名は英語)

今年度の平和共生論文のタイトル※一部抜粋

- 貧困と支援 ―学生の私には何が出来るのか、フィリピンの事例より―
- 国同士の戦争がない社会をどのようにして作るのか
―ヨーロッパ統合を例に考える―
- 日本における人種・民族差別の法規制
- ユニバーサルデザインをすべての施設に
- 日韓関係の認識と理解―私の視点から探る関係改善への道―
- 技術の発展が人間に与える未来―兵器の進化と人間の主張の矛盾―
- オリンピックを迎える日本はテロとどう向き合っていくか
- フェアトレードは農業生産者を本当に貧困から救うのか？
- SDGs に基づく食品ロスに関する考察
- 児童労働と向き合う

【今後の課題と展望】：

昨年よりも各作業の締め切りを早めたものの、やはり高校生活全体を通じての成果というより2年次後半以降のそれぞれの取り組みとなっている感がある。さらに早い段階から問題意識をしっかりと熟成し、かつ執筆期間を多くとれるようにして、質の向上を目指す指導を行いたい。



【グローバルウィーク】

活動概要

【参加生徒】：全校対象

【場所】：青山学院高等部 大会議室・PS 講堂・2F エントランスホール 他

【目的】：

グローバル社会で活躍するサーバントリーダー像を全校生徒で共有するために、6月と10月に1週間ずつ特別な期間を設けている。スタディツアーで活躍した生徒や講師を招き、二次体験者やSGHの活動に積極的な参加を希望する生徒を育むことが狙いである。

【内容】：

6月と10月に、グローバルな学びに焦点を当てた特別な1週間を設置している。

毎日行われる礼拝では、聖書のメッセージに重ねてサーバントマインドを持つことの大切さが述べられる。昼休み・放課後に行われるワークショップやセッションでは、スタディツアーを体験した生徒や協力していただいているNGOなどの専門家が担当してそれぞれの学びを全校生徒と共有する時を持ち、強く興味を持った生徒の中に二次体験者を育てることを意図している。各ウィークの土曜日には校外に出かけて平日に実施できないアクティビティを行ったり、週末にしかお招きできない方に来ていただいたりする機会としている。グローバルウィークⅠでは身近な人とのつながりから共に生きる社会の在り方考える機会として「共生～Our Neighbors(隣人)～」というテーマを、グローバルウィークⅡではさまざまに規定される私たちのつながりを再考する機会として「Get Connected～コミュニティ再生～」というテーマを設定した。

グローバルウィーク明けには全生徒が各自の「平和共生 LogBook」に、礼拝を受けたりワークショップに参加したりした際の気づきを記載したページをファイルし、さらにeポートフォリオにアップロードすることとした。



◆グローバルウィークI

【日程】：2018年6月18日～6月25日

【担当】：武藤拓(理科)、藤本晃弘(地理歴史科)、相良昌彦(聖書科)他

【内容】：

- 校内で活動している6つの団体が、自分たちの学びや活動を自由にプレゼンして多くの生徒に知らせ、気づかせる時間・空間を作る試みを行った。
- ボランティアについて、隣人と支え合って作り出される社会について、意見を交わす場を持った。青山学院大学に來ている留学生や車いすのアスリートの方、様々なスタディツアーで気づきを得た生徒たちと、意見を交わす場を多く設定した。



プログラム日程

日付		タイトル	ゲスト・担当	所属
前週 5日間 6/11～ 15	昼休み 放課後	図書館キャンペーン	高等部図書館	高等部
1日目 6/18	礼拝	共生は受容から	岩下 よし子氏	児童発達支援施設 放課後本舗六軒町
	昼休み	ユニバーサルな街づくり& デザイン思考ワークショップ①	PwCコンサルティング 合同会社	PwCコンサルティング 合同会社
	放課後	ユニバーサルな街づくり& デザイン思考ワークショップ②	PwCコンサルティング 合同会社	PwCコンサルティング 合同会社
2日目 6/19	礼拝	平等と平和と神の国	河見 誠副学長	青山学院女子短期大学
	昼休み	高等部生徒団体の グローバル・ショーケース	高等部生徒団体	高等部生
3日目 6/20	礼拝	共に喜び、共に泣く	高等部卒業生 谷 純太	青山学院大学生
	昼休み	グローバル・ショーケース アフターセッション	高等部ボランティア部員	高等部生
4日目 6/21	礼拝	What can we do together?	Carroll Scott	英語科教員
	昼休み	スペシャル・チャットルーム	チャットリーダー	青山学院大学留学生
5日目 6/22	礼拝	フィリピン訪問プログラムに 参加して	フィリピン訪問プログラム 参加生徒	高等部生
	昼休み	フィリピン 支援チャイルドと関わり 貧困について学ぼう！	フィリピン訪問 プログラム参加生徒	高等部生
	放課後	貿易ゲームを通して 貧困の深層へ迫ろう	フィリピン訪問 プログラム参加生徒・ CFJスタッフ	高等部生 認定NPO法人 チャイルド・ファンド・ ジャパン(CFJ)
6日目 6/25	放課後	今の宮古とこれからを考える 宮古座談会	FOR会	高等部生 青山学院大学生

内容	参加人数
図書館利用促進のため、資料の貸出数を通常の倍にした。また、平和・共生に関するクイズ大会や、差別や人権に関する映画の上映会、読書会を行った。	350名(延べ)
「共生は受容から」と題して、外国の方々との交わりだけが異文化コミュニケーションではなく、障がいをもった人々との交わりも同様であり、他人を受け入れる為にはまず自分自身を受け入れている実感が必要であると語った。	全校生徒
昨年に引き続き、車いすバスケットボールのパラリンピック日本代表選手を迎えて、デザインシンキングの手法を取り入れた【デザイン思考を用いた「ユニバーサルな街づくり」ワークショップ】を開催。昨年おこなったワークショップでの生徒の意見を取り入れたアプリのプロトタイプを見せて頂いた。そこから新たに生まれた課題として、車いす利用者が助けを求めやすく、周りの人が助けやすくするにはどうすれば良いかを、選手と共にディスカッションし、最後に発表し合った。	約20名
	約20名
「平等と平和と神の国」と題して、先に得た者が自分たちだけで繁栄を享受するのではなく、必要が満たされず苦しんでいる者に手を差し伸べること、あるいは苦しんでいる者同士がお互いを助け合うような、キリストの愛の関係を率先していこうと語った。	全校生徒
前半は、6つの団体が各設置ブースにて3～4分のポスターセッションのループ発表を実施。各ブースではタブレット端末とQRコードを用いてアンケート調査にも取り組んだ。後半は、各団体の代表生徒による90秒プレゼンテーション。特設ステージを設けて、ギャラリーに集まった生徒全員でプレゼンテーションを聞き、各々の活動への理解を深めた。	約200名 内アンケート 回答者 117名
「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」という聖句より、高等部の中だけで留まるのではなく、自ら外へ出て行って様々な人々と出会い、「共に喜び、共に泣く」ことを分かち合っていて欲しいと語った。	全校生徒
ボランティア部では、毎月一回、知的障がいがある人びとと交流する地域活動に参加している。この活動のこと、そして知的障がいのことを広く一般の生徒に知ってもらうため、地域活動で実際に行ったゲームを交えながら展示と発表を行った。	約150名
日本は豊かな国として知られているが、実際には6人に1人が貧困という格差社会である。近年は食品ロスや、教育が受けられないと安定した職業につけないといった悪循環も大きな問題として浮上してきている。"What can I do? What can we do together?"と呼びかけ、自分がたくさん与えられていることを自覚し、他者に与えていくことが大切であると語った。	全校生徒
青山学院大学に在籍する留学生10名と「Volunteer」をテーマとした英語でのディスカッションを実施。日本を始め世界中でさまざまなボランティア活動が展開されていることを知り、高校生である自分たちが具体的に参加できる活動を考えて。	85名
フィリピンを訪問した生徒のうち1名が礼拝で話をし、フィリピン訪問プログラムを通して学んだことや、現在高等部がクリスマス献金を通して支援しているチャイルドの学校・生活について共有する時間を持った。学びを支える原体験としてのチャイルドとの出会いを持ち続けるために、クラス単位でのチャイルド支援についても呼びかけた。	全校生徒
昼休みの時間を使い、フィリピンを訪問した生徒がプレゼンテーションを実施。フィリピンの現状と課題、それに対して高等部が認定NPO法人チャイルド・フアンド・ジャパンと共にどのような活動に取り組んでいるのかを発表した。	65名
放課後は参加型アクティビティ「貿易ゲーム」を開催。各国の環境を模した設定のグループ対抗ゲームでは、予め不平等な初期条件を設定する。豊かなグループはより豊かに、貧しいグループはより貧しくなるというように、経済格差が拡大していく仕組みを現実の自由貿易システムと対比していく。格差社会を体験的に理解することが出来た。	約30名
宮古訪問プログラムに参加した卒業生らを迎え、放課後の時間を使って今後の被災地支援活動についての座談会を実施。被災地の現状と問題点を理解した上で、具体的な打開策や地方創生案を考え、各々が意見を述べ合った。	6名

図書館キャンペーンについて

○平和・共生に関するクイズ大会

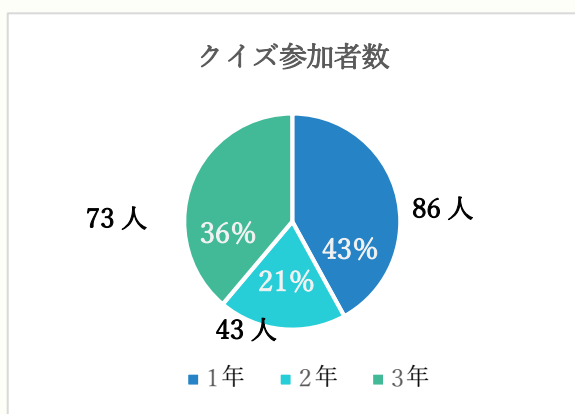
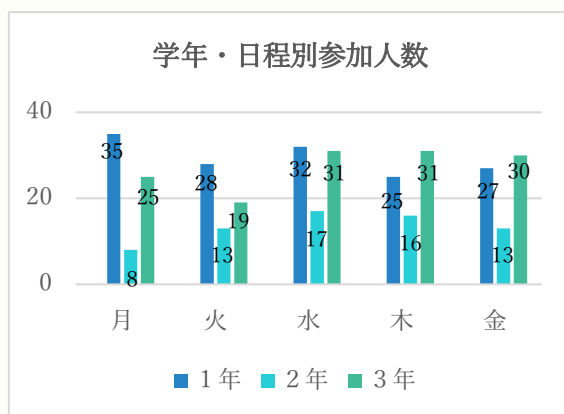
一日 70 問のクイズに対して、延べ 350 名(実人数 202 名)が参加した。参加者の半数以上が一回のみの参加にとどまったが、6 名は 5 日間連続で参加した。2 年生の参加が少なかったのは残念だった。

学年・日程別参加人数

日程 学年	月	火	水	木	金	合計		
						男	女	計
1年	35	28	32	25	27	24	123	147
2年	8	13	17	16	13	5	62	67
3年	25	19	31	31	30	22	114	136
計	68	60	80	72	70	51	299	350

回数別参加者数

参加回数 学年	1回	2回	3回	4回	5回	合計		
						男	女	計
1年	54	15	9	5	3	25	61	86
2年	29	7	4	3	0	5	38	43
3年	41	13	10	6	3	22	51	73
計	124	35	23	14	6	52	150	202



○映画会(6月12日)

作品名:『レ・ミゼラブル』 監督: トム・フーパー

キャンペーン期間中、昼休みに 15 分間の上映を行った。生徒が上映内容を要約したレジュメを作成し、参加者に配布した。上映中にシーンの解説をいれたので途中でも参加しやすかった。劇中の『民衆の歌』が流れると、多くの生徒が足を止め、真剣に鑑賞した。平和と共生について考える良い時間となった。

○読書会(6月15日)

テーマ：『言葉の通じない相手と仲良くなるために』

上記テーマについて、異文化に関する本を読み、理解を深めた。様々な意見の中で、特にジェスチャーを使うことの問題点が多く話された。同じジェスチャーでも国によって受け取る意味が異なるということがわかり、代案として翻訳機やアプリを使うという意見がでるなど、活発な議論が交わされた。まとめをボードに貼り、図書館に展示した。

◆グローバルウィークⅡ

【日程】：2018年10月1日～10月5日

【参加生徒】：全校対象

【場所】：青山学院高等部 大会議室・PS講堂・エントランスホール 他

【担当】：藤井徹也(英語科)、藤本晃弘(地理歴史科)他

【内容】：

- 東ティモールスタディツアーおよび宮古訪問プログラム参加者がそれぞれの学びについての報告と、今生徒たちができる取り組みに関して具体的なアクションを行った。
- 昨年に続き、他者とのつながりをどのように構築すべきか考えることを軸に、様々な形で私たちがかかわる集団を正しく機能させるための知見を得られるよう「コミュニティ再生」というテーマで一週間を過ごした。
- ポピュリズムの台頭で現代社会は分断の危機にある。国連で活躍される講師によるセッションでは、グローバル社会の重要性を再考する時を持つことができた。



プログラム日程

日付		タイトル	ゲスト・担当	所属
1日目 10/1	礼拝	同調圧力に負けずに 平和の実現をするには	神田英輔氏	NGO 「声なき者の友」の輪
	昼休み	タコツボ社会のなかでお互いを 意識し合う同調圧力を 体感するワークショップ	神田英輔氏	NGO 「声なき者の友」の輪
2日目 10/2	礼拝	宮古訪問プログラムに参加して	HR309 村上太一	高等部生
	昼休み	宮古訪問プログラム報告会	宮古訪問プログラム	宮古訪問プログラム参加 高等部生
	放課後	宮古を通して、 コミュニティ『再生』を考える 座談会	宮古訪問プログラム	宮古訪問プログラム参加 高等部生
3日目 10/3	礼拝	国連の目指す平和	山本和氏	元国連職員
	昼休み	2018年度フィリピン訪問 プログラム説明会	フィリピンプログラム 参加生徒 CFJのスタッフ	認定NPO法人 チャイルド・フレンズ・ ジャパン (CFJ)
	放課後	国際機関による 平和構築とコミュニティ再生 GLOBAL WORKSHOP	山本和氏 山崎節子氏	元国連職員
4日目 10/4	礼拝	東ティモール スタディツアーに参加して	HR304 吉田光佑	高等部生
	昼休み	東ティモール コーヒー試飲会	生徒自主学習団体 ブルーペコ	高等部生
	放課後	東ティモールvsタイ コーヒーで村おこし ディスカッション	生徒自主学習団体 ブルーペコ 青山学院大学地球社会 共生学部 of 生徒	高等部生 青山学院大学生
5日目 10/5	礼拝	How can you increase the “good person” ranking?	SAM BERRY	英語科教員
	昼休み	スペシャル・チャットルーム	チャットリーダー	青山学院大学留学生
	放課後	ノーモア食品ロス ゲームワークショップ	AOYAMA セカンドチャンスメンバー	高等部生

内容	参加人数
杉原千畝を例に、「同調圧力」のある日本社会の中で良いコミュニティを再生させていくためには、場の空気に流される人ではなく「命」の選択をしていく人であることが大切だと話された。	全校生徒
NGO「声なき者の友」の輪から神田英輔氏をお招きし、ワークショップを実施。日本社会における根強い同調圧力の仕組みや存在について知識を深めながら、自分の信念に従って生き、コミュニティ再生に貢献できるような具体的な行動や活動を発表し合った。	約70名
夏に宮古市を訪問した生徒が、そこでの出会いや共同プログラムを通して与えられた経験から、これからの支援について自分が考えたことを伝えた。	全校生徒
宮古訪問プログラムに参加した生徒が、作成した展示物や動画を紹介しながら報告会を行った。宮古市特産の磯とろろスープを提供し、集まった生徒たちとさらに理解を深め合うことが出来た。	約200名
「あなたにとってのコミュニティとは」という問いかけから始まり、「コミュニティにどのように関わっていききたいか」等をテーマにグループディスカッションを行い、それぞれが出した答えを発表して意見を共有した。	16名
国連の目指す平和とは、宗教や文化の壁を乗り越える普遍的な真理を反映したものであり、価値ある働きである。困難を乗り越えて、平和の実現を目指すという目標を大切にしたいと奨励された。	全校生徒
青山学院の学内合同プロジェクトとして行っているフィリピン訪問プログラムに参加した生徒が、次年度のプログラムに参加を希望する生徒に向けて報告と説明会をおこなった。フィリピン訪問中の様子や、自分達の中で参加する前と後で変化したところ、自分達が学んだことや高等部が支援しているフィリピンのチャイルドたちの現状について共有した。	36名
4名の高等部生がファシリテーターを務め、元国連職員の山本和氏・山崎節子氏をお迎えしての講演会とディスカッションを開催。国連機関の設立と目的や、7か国にわたる具体的な体験談を含め、国際的リーダーに求められる要素をお話しいただいた。	62名
東ティモールのコーヒー農家を訪問した生徒が、与えられた出会いを大切に受け止めている経験を通し、「自分達はどのような消費者であるべきなのか」について考えたことを共有し、農家の人々とパートナーとして関わっていくことを奨励した。	全校生徒
東ティモールコーヒーを飲んで、考え、農家の人々となつがる“パートナー”となることを目的に、コーヒー試飲会を開催。多くの生徒が集まり、用意していた500杯分のコーヒーが全て配られた。コーヒーのハンドドリップのデモンストレーションや生徒による説明、ドリップバッグの販売も行った。	約500名
生徒自主学习団体ブルーペコがタイの山岳地帯のコーヒー農家支援プロジェクトをおこなう青山学院大学地球社会共生学部3年生を迎えて、それぞれの活動をプレゼンテーション。今後の支援についてディスカッションをおこなった。	16名
「良い国」指標があるように「良い人」指標があるとすれば、どうしたら私達はその順位をあげていくことができるのかという問いから、普段の生活の中で1つでも問題意識を持ってアクションを取っていくことが大切だと奨励された。	全校生徒
青山学院大学に在籍する留学生10名と「コミュニティとボランティア」をテーマとしたディスカッションを実施。家族・友人・国など自分の所属するコミュニティや、東京オリンピックのボランティアについて様々な意見交換をおこなった。	約90名
カードゲーム“食べ残しNOゲーム”を通して食品ロスの要因や解決策を学び、理解を深めた。また、青山セカンドチャンスのメンバーから“食べ物に困らない未来”をつくるために、いま自分たちに出来ることについて話を聞いた。	約17名

【評価】A-

グローバルウィークⅠの昼休みには、本校で活動する6つの団体がそれぞれが取り組んでいる問題点と解決のために自分たちが行っている活動をプレゼン形式で紹介しあうセッションを行って、多くの一般生徒の関心を引き寄せた。みんなが自分の関心のある問題にかかわることが当たり前、という空気感を創生するための企画であった。グローバルウィークⅡでは、人と人、国と国が繋がりがあってできるコミュニティを意識化する試みを行った。セッションやディスカッションを通して、「つながり」というものに関する生徒たちの意識が意外と希薄であることが分かったのも収穫であった。本当に希薄であるのか、空気のように存在している帰属感を客観視できていないのかは、分析する価値がある。

【今後の課題と展望】：

来年度においては、上記「グローバルショーケース」のような試みを秋のグローバルウィークⅡでも行ってみたい。それぞれの問題・課題は、自分たち一人ひとりが今まさに直面しているものなのだとすることを実感できる状況を多く生み出すことで、課題に向けた学びの意識を促進していきたい。

また、「今、ここに存在するコミュニティ」を意識化する作業がないと、国際社会やグローバルコミュニティという概念を考えることが難しいとも感じた。前述したが、地域でコミュニティを体感する機会が激減してしまっていることが、従来の感覚で生徒とコミュニティを論じることが難しくなっている原因の一つといえそうだ。その意識の差異も考慮しながら、次年度も「コミュニティ再生」というテーマを掘り下げていきたい。



【グローバルウィーク中に実施された特設プログラム】

◆パラリンピック車椅子バスケットボール日本代表選手と考える

「ユニバーサルな街づくり」 & 「デザイン思考」ワークショップ

活動概要

【日程】：2018年6月18日 12時35分～13時05分・15時50分～17時50分

【参加生徒】：38名

【場所】：本校大会議室

【担当】：PwC コンサルティング合同会社

【目的】：

車いすバスケットボールのパラリンピック日本代表選手を迎えて、デザインシンキングの手法を取り入れ、昨年おこなったワークショップでの生徒の意見を取り入れたアプリのプロトタイプから生じた課題の解決策を選手と共にディスカッションし、改善案をグループ毎に提示する。

【内容】：

- 昼休みにデザインシンキングの手法について、基本的なレクチャーを行った。
- 昨年おこなったワークショップで出された生徒の意見を取り入れたアプリのプロトタイプの紹介と課題を提示した。
- KJ法を用いてグループディスカッションを行った。「車いす利用者が助けを求めやすく、周りの人が助けやすくするにはどうすれば良いか」というテーマについて話し合った。
- グループごとにディスカッションした結果のプレゼンテーションを行い、車いす使用者や他のグループからの質問に対応した。

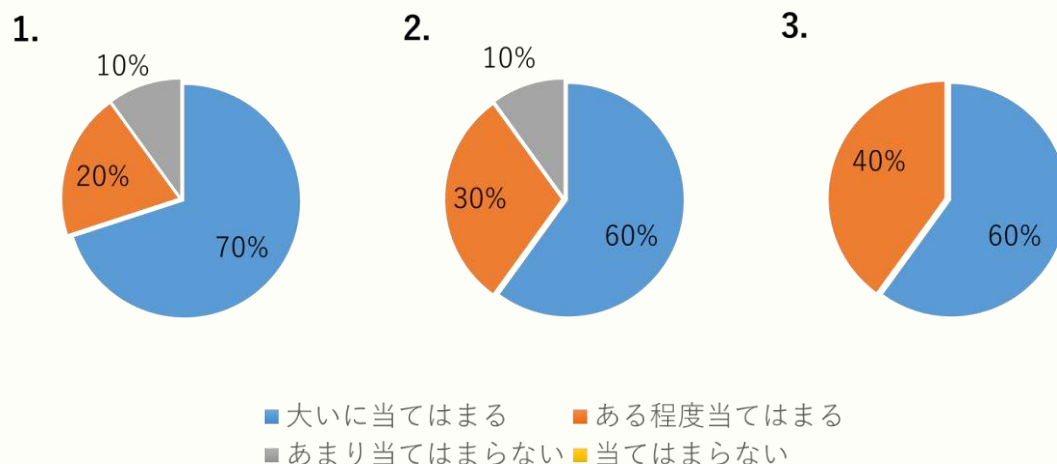
【参加生徒のコメント】：

・五体満足な自分でもこの街には使いづらい所があったので、今回改めて障がい者の方のお話を聞いて、私たち未来を作っていく者たちはもっとどんな人でも使いやすいデザインに富んだものづくりをしていかなければならないなと思います。今後は様々な人の意見を聞いて、今ある問題についてもっとよく知っていきたいなと思います。

【検証】：

プログラム実施後、参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

1. このプログラムに参加して、普段見過ごしがちなことにも疑問を持ち様々な場面から問題をみつけることができた。
2. 普段、自分が「当たり前」だと思っている事とは違う考え方や物事の捉え方を学ぶことができた。
3. 自分とは違うグループや境遇の人たちの考え方を認めることは大切だと思う。



【評価】：B

昨秋のグローバルウィークⅡで実施したコンサルティング会社PwC 寄付講座の第2弾。
「前回の生徒が発案したものが具体的なアプリの形をとりつつあるので、自分たちの発想が本物であるということを見てもらいたい」という申し出を受けて開催が決まった。生徒も「自分たちの考えに企業の方たちが興味をもってくれている」ということに自信を持てたようであった。また、ディスカッションでは、車いすバスケットの選手を交えたグループを編成し、アプリ作成過程で抽出された「車いす利用者が助けを求めやすく、周りのひとが気軽に声掛けのできる社会」を実現するにはどうすればよいのか、活発な話し合いがなされた。このセッションの参加者の3分の2が前回のセッションに参加。今回が初めてである生徒と意識の差があるのはあらかじめ予測されていた。

【今後の課題と展望】：

生徒の持っている無邪気で素直な発言の中に、先の見えない未来に十分太刀打ちできる発想が垣間見える、とPwCのコンサルタントの方に賛辞をいただいた。学校教育の枠にとらわれない活動が、生徒の様々な気づきを生む場面を提供することを改めて知ることができた。もう一年間あるSGHの取り組み期間に、指定校だからこそできる民間企業とのタイアップの可能性を検討していきたい。

また、来年度からカリキュラムの中に置かれる探究学習では、デザイン思考をはじめ、様々な思考スキルが要求される学びが行われるようになる。生徒全員が、こうした思考技術を積極的に学びとる機会を持たなければならないと考える。



◆タコツボ社会の中でお互いを意識し合う同調圧力を体感する

ワークショップ

活動概要

【日程】：2018年10月1日 12時35分～13時05分

【参加生徒】：70名

【場所】：本校大会議室、青山学院キャンパス周辺

【担当】：神田英輔氏(NGO「声なき者の友」の輪代表)

【目的】：

日本社会における同調圧力について、身近なところをはじめとして理解を深め、コミュニティ再生について考える。周りに流されることなく選択をする者になるための理解を深める。

【内容】：

- 社会における根強い同調圧力の仕組みや存在について知識を深める為のレクチャーを行った。
- 身のまわりで同調圧力を感じる場面について考え、ディスカッションを行った。

【参加生徒のコメント】：

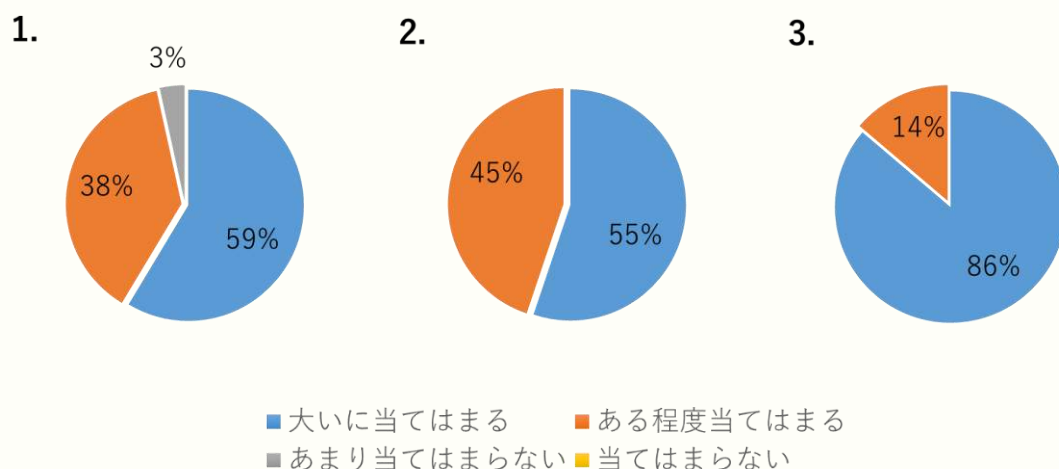
・自分が様々なコミュニティの中で生きていて、そのひとつひとつが大切だと改めてわかりました。そして自分はそのコミュニティの一員であることも理解できました。同調圧力に流されて常に多数派でいるのではなく、自分の意思をもって、自分の信念に背かないようにしたいです。また、少しでも貢献したいと思うようになったので、ボランティアをしてみたいです。今すぐできることとしては、思いやりの心を忘れないようにしようと思います。

・クラスという身近なところにも同調圧力が無意識のうちにあるかもしれないということに気づかされた。私は普段周りと合わせることについ必死になりがちだが、自分が違うと思ったときには違うとちょっとずつでも意思表示する重要性を感じた。また、一人一人の意見が尊重されるようにみんなが相手の意見を素直に受け入れてあげる姿勢を持つことも必要だと感じた。

【検証】：

プログラム実施後、参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

1. 普段、自分が「当たり前」だと思っている事とは違う考え方や物事の捉え方を学ぶことができた。
2. このプログラムに参加して、普段見過ごしがちなことにも疑問を持ち様々な場面から問題をみつけることができた。
3. コミュニティ内で個が自立していることの大切さを理解することができた。



【評価】：A

今年スポーツ界で起こった内部圧力による不祥事を取り上げ、日本社会がコミュニティを形成する際に陥りやすい問題点について、レクチャーとディスカッションのワークショップを実施してもらった。レクチャーでは生徒が頷く様子から、話題に強く引き付けられていることが確認できた。また、自分の身の回りで起こっていることをクラスや学校の日ごろの活動の中から拾い上げて、活発な話し合いが行われた。普段、気づくことのない日常を振り返る機会を持つことができた。伝統的なコミュニティの在り方も、各自が自立することで新しいものに再生されるべきだという考えに思い至った生徒もいた。

【今後の課題と展望】：

昨年は SNS を介して存在する新しい人間関係、今年は我々の社会の中に存在する普段気づくことのない伝統的なコミュニティの在り方に焦点を当ててのセッションを実施していただいた。神田英輔先生には本校の SGH 指定後より、継続的に礼拝のお話を担当していただき、セッションのお世話をさせていただいており、本校生徒の気質をよく理解した上で、効果的なメッセージをくださっている。この SGH プログラム全体の基調をなしているといえる。来年も続けてグローバルウィークにお呼びして、「コミュニティ再生」に必要な知識と知恵をお与えいただければと思っている。



【生徒自主学習団体ブルーペコによるフェアトレード活動】

活動概要

【報告者】：藤本晃裕(地理歴史科)

【日程】：2018年4月～2019年3月(昨年度より継続中)

【参加者】：ブルーペコ登録者 約40名、ブルーペコに関係する各プログラム参加生徒

【目的】：

世界が抱えている現実の問題に目を向け、その解決への取り組みに実際に関わろうとすることによって、更に広いグローバルな視点とグローバル社会への志向性を強める。
貧困問題解決のための取り組みと、開発途上国の生産者・商品購入者双方の利益を考えた経済活動支援に向けての課題設定を主たる活動内容とし、生徒の自己評価と学校によるプログラムの成果検証を行う。

【内容】：

- 2007年に立ち上げられた生徒の自主学習団体ブルーペコが継続的に行ってきた、東ティモール支援のフェアトレード活動に対する理解を深めるための勉強会を実施した。

日程

4月26日	全体ミーティング 【テーマ】昨年度の活動報告と今後の方針について 昨年度の振り返り。今年度の活動方針の決定と今後の取り組みについて話し合い
4月27日	東ティモールコーヒー試飲会の実施
5月1日	勉強会 【テーマ】Fair trade, FLO, 教育について 各テーマについて調べた生徒がプレゼンテーションを実施。そこから明らかになった東ティモールの実態を踏まえ、支援として何が必要かのディスカッションを実施
5月8日	勉強会 【テーマ】同上
5月11日	コーヒー試飲・勉強会の実施
5月15日	ミーティング
6月8日	ミーティング
6月15日	ドリップ講座 【テーマ】コーヒーが出来るまで～コーヒーの淹れ方
6月19日	グローバルウィークIでのイベント「グローバルショーケース」での発表 ※詳細は【グローバルウィーク】を参照
6月26日	ミーティング

● 事前学習

7月23日	スタディツアー渡航前勉強会 【テーマ】東ティモールにおけるフェアトレードの現状について 青山学院大学在籍、2年前のプログラム参加学生を含めたディスカッションと発表
8月2日	識字率向上プロジェクトのためのカルタ製作
8月3日	識字率向上プロジェクトのためのカルタ製作



● 東ティモールのケーススタディと現地調査

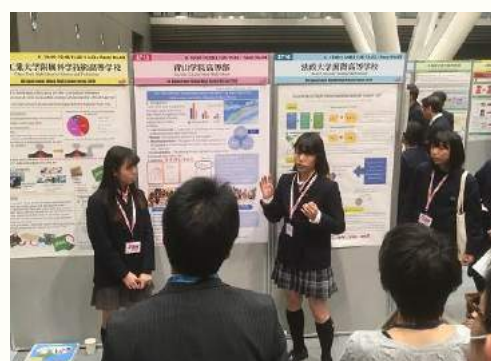
現地調査日程(8月5日～12日)

8月7日	レテフォホの小学校を訪問 レテフォホのコーヒー農家に密着学習 コーヒーの品質管理とフェアトレードについてのディスカッション
8月8日	レテフォホのコーヒー農家に密着学習 特定非営利活動法人ピースウィンズ・ジャパンの現地駐在員やコーヒー農家の方々と一緒に、収穫体験や品質管理、加工や事務所での仕事などを見学
8月9日	特定非営利活動法人ピース・ウィンズ ジャパン事務所、加工場、カフェ、焙煎所訪問 特定非営利活動法人ケア・インターナショナル事務所訪問 ラファエックプロジェクトについての学習・プロダクションルームの見学
8月10日	地域訪問・ラファエックを用いたコミュニティ・ダイアログの見学 農村における女性の地位向上についてディスカッション
8月11日	タイスマーケットの訪問と、ディリでの女性の地位向上に関する活動のインタビュー 東ティモール独立前の内戦時代の体験談のインタビュー



● 事後学習：レポート、各イベントでの発表、全体ミーティング

9月7日	東ティモール訪問報告会 【テーマ】東ティモールスタディツアー報告会・コーヒーの試飲
9月15日 17日	文化祭でのブルーペコブースの展示・活動報告・フェアトレード物品販売・コーヒー試飲会の開催
9月29日 9月30日	グローバルフェスタ・JAPAN 参加、学習報告
10月4日	グローバルウィークIIでの礼拝の奨励、東ティモールコーヒー試飲会の実施、青山学院大学地球社会共生学部の学生とのセッション ※詳細は【グローバルウィーク】を参照
10月24日	Plan International の東ティモール人女性活動家とのセッション
12月2日	SGH 成果報告会での発表
12月15日	全国高校生フォーラムでの発表 【生徒投票賞受賞】



【評価】：A

昨年度同様、現地の農家と支援地域の学校を訪問し、現地児童・生徒と交流することを通じて世界の中の経済格差問題に対する認識を深めることができた。事前学習の中で、従来の FLO による「フェアトレード」認証のシステムがカバーできていない貧困の形態を知ったことで、地域固有の問題に取り組んだ点が今年度の特性としてあげられる。

コーヒーの生産地レテフォホでは、識字率の問題や女性の地位の問題に加え、国家として独立してからの期間が短いために東ティモール政府の政策が現場の要望に間に合っていないことに起因するインフラの問題・環境汚染の問題といった数多くの要素が複合的に絡まり、改善が困難な状況である。そのため、政治的なエンパワーメント、経済的な自立、適切な支援の要請など、住民に求められる力は大きく、NGO や外郭団体との関わり方もデリケートである。

プログラム参加生徒は、地道にコーヒーの品質改善を重ねる農家の方へのインタビューや地域をまとめているリーダーへのインタビューを経て、自立に向かう地域のマネジメントについての知見を得た。

また、一昨年度から識字率向上プロジェクトの一つとして研究してきた、カルタを用いて文字を学ぶ企画の実地研究を現地の小学校で行った。子どもたちはカルタのルールをすぐに理解し、自立的にアルファベットと英語の学習を始めたが、効果の持続性などは検証が必要であり、来年度の課題とした。

訪問を通じて、コーヒー産業の持続的な発展のために消費者サイドのリテラシー向上が不可欠であることを知った生徒たちは、帰国後に積極的にイベントや報告会を行っている。また、コーヒーの試飲会や報告会を通じて行われる全校生徒へのフィードバックは、グローバルウィークや文化祭等を通して拡大傾向にあり、充実している。

【今後の課題と展望】：

消費者リテラシーの向上というテーマを持ち帰ってきた参加者はこれから具体的なアプローチの仮説と検証の段階に入る。また、貧困の構造的な理解に関しては、問題の複雑性を理解しつつある。現在はそれぞれの NGO の活動のスタンスの違いや考え方の違いを整理しており、今後はより俯瞰的な分析を行うとともに、東ティモールの貧困問題へのあるべき支援の姿の検証に入る。

【東日本大震災被災地 岩手県宮古市との交流】

活動概要

【報告者】：武藤拓(理科)、吉成大輔(国語科)

【担当】：武藤拓(理科)、吉成大輔(国語科)

【参加者】：宮古に関する各プログラム参加生徒（うち、宮古現地研修は生徒 14 名）

【目的】：被災地へ足を運び、現状を理解すると共に現地の人々と接点を持ち、学びを得る。また、東日本大震災被災地の高校との交流を通して、新たに見出される被災者支援の可能性や、日本の地方文化の多様性の発見を目指す。

【内容】：

- 14名の生徒による短期間の宮古市への訪問プログラム
- 現地高校生の本校文化祭への受け入れ
- 校内の生徒に向けた様々な形態による活動報告
- プログラムに関わってきた卒業生と共に、これからの被災地に関わる活動を考える話し合いなどを継続実施
- SGH 成果報告会での発表

【研究日程】：

事前学習

6月19日	グローバルウィークIでのイベント「グローバルショーケース」での発表 ※詳細は【グローバルウィーク】を参照
6月20日	今年度宮古訪問プログラム参加者顔合わせ 役割分担、自分の課題を考え始める、事前学習の資料集め
6月25日	グローバルウィークIでのイベント「FOR 会」(未来のための意見をもう一度考える会) 【テーマ】今の宮古とこれからを考える ※詳細は【グローバルウィーク】を参照
6月28日	事前学習(宮古、田老についての情報、復興の状況について)の資料提出
7月17日	自分の課題提出、現地活動のアイデア出し合い、集めた資料の配布・共有



宮古訪問プログラム 8月2日(木)～8月5日(日)

8月2日	宮古湾フェリーターミナル訪問 宮古―室蘭航路の就航を記念して、昨年青山学院でも行った「壁画プロジェクト」完成の様子を見学。 防災研修「学ぶ防災」受講(防潮堤の見学、ビデオ視聴) 田老地区にある巨大防潮堤を見学。震災遺構「たろう観光ホテル」にて、そこで撮影された津波映像を見ながら、話を聞いた。
8月3日	災害公営住宅の方との交流会 (田老地区) 現地の大人の方々とゲームや会話を通して交流を深めた。 宮古北高校訪問 (田老地区) スポーツ交流 ブレイン・ストーミング 【テーマ】「震災からの復興」について 「復興が進んだこと、進んでいないこと」、「何を大事にして、何をを目指すのと良いのか」、「高校生に何ができるのか」についてのアクティブラーニングとプレゼンテーション 文化祭チャリティー販売用グッズのデザインの相談
8月4日	宮古第一中学校の震災資料室「ボイジャー」見学 わかめ芯抜き体験(田老町漁協) グリーンピア体育館にてイベント開催 青山学院女子短期大学の学生が現地の子どもたちのために企画したイベントにおいて、各ブースでお客さんが楽しめるよう対応をした。
8月5日	みやっこベースによる宮古スタディツアー トンネル工事現場見学、震災後作られたハーブ園を見学、石鹸作り体験 (みやっこベースで宮古高校生ラジオ担当の生徒2名同伴)



事後学習

	参加生徒がそれぞれ事前に課題を設定し、訪問終了後レポートを作成した。 【レポート課題例】(一部抜粋) ・被災地の現状を見て私たちが何かできることはあるのか？少しでも力になれることは何なのかを考えるきっかけを作る ・①現状を知って、いかにまわりに伝えられるか考える②(私の)身のまわりにある大丈夫だと思っているものにひそむ危険性を考える ・震災当時の様子と震災が発生してから現在に至るまでの復興状況を知り、私たちにできることは何かを考える。また、同年代の意見や価値観を互いに共有する
9月15日 17日	本校文化祭における交流(宮古北高校生徒会執行部7名、引率教員2名来校) ・宮古産海藻販売、チャリティーグッズ(宮古北高校とのコラボデザインのタオル等)販売 ・カフェテリアでは田老地区のわかめを入れたわかめラーメンを販売・PR ・両校生徒で共同作成した「震災からの復興」についての模造紙ポスター、宮古北高校・田老地区紹介の掲示
10月2日	グローバルウィークⅡ期間中の礼拝の奨励、訪問プログラム実施報告会、「宮古を通してコミュニティ再生を考える」をテーマに座談会 ※詳細は【グローバルウィーク】を参照
1月9~25日	生徒企画による田老産海藻の生徒への販売と、訪問で学んだことを発信した。



【生徒の声】:

・宮古北高校の生徒の一人がディスカッションの中で、復興が進んでいる所には「三鉄」や「仮設住宅の取り壊し」など私たちと大体同じ意見を書いていましたが、復興が進んでいない所に「都会の人が忘れてしまうこと」「僕たちより後の世代に伝えていく手段が少ないこと」と書いてありました。確かに私たちは、自分達が経験していないことを甘く見てしまいがちな部分があると思います。例えば「戦争」の記念碑などを見ても戦争を経験していない私たちはその時は“気をつけよう、平和になろう”と思いますが、普段の生活の中でそれを思う時間はかなり少ないです。このように、私たちは自分が知らないと大事なことを忘れてしまいがちです。震災を知っている人は必ずこの先少なくなっていくと思います。その時までには私たちは①心のケア②後世に伝えていく方法の二つを同時に行わなくてはならないと感じました。

・被災者ではないわたしにとって、震災はすでに何年も前の話であり、生活には変わりはなく、普段の生活では全く意識せずに生活するのが当たり前になってしまった。東日本大震災のことにしても、一見ガレキが見あたらないことからだいぶ復興している

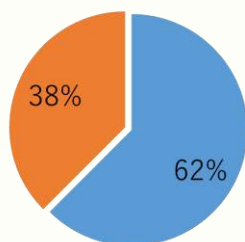
のは確かだが、問題意識をもって風化させないように、ということばかりを考えていた。彼らの心の内を考えていなかった。日本に住む多くの人がそうかもしれない。しかし、今回の訪問で大きく「心」で感じた「心」の復興の重大性を、あの笑顔、感謝、悲しげな顔を忘れず、自分たちに何ができるのかを引き続き考えていきたい。

【検証】：

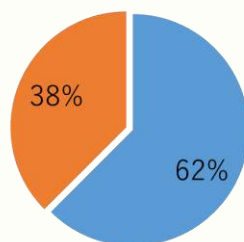
このプログラム実施後、訪問プログラム参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

- 1.このプログラムに参加したことによって、以前より被災地での問題や支援について考えるようになった。
- 2.直接関わりがない地域や人のことであっても、どこかで自分に繋がっていると思う。
- 3.このプログラムに参加したことによって、日本の地方文化や多様性を発見した。

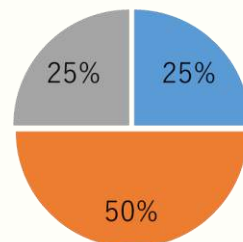
1.



2.



3.



■ 大いに当てはまる ■ ある程度当てはまる
■ あまり当てはまらない ■ 当てはまらない

【評価】：A

- ・校内エントランスホールでの活動報告会では田老地区のとろろ昆布スープの試食を行い、昨年同様、多くの生徒を立ち寄らせることができた。昨年から改善された点としては、訪問した生徒による展示や口頭発表を試食と同時に行い、多くの生徒と共有する機会にすることができた点があげられる。
- ・参加生徒が「こんなに一生懸命考えたことはなかった」というくらい、現地で体験をすること・話を聞くこと・意見を交換することは大きなインパクトとなり、そこに生徒の積極的な関わりが加わることでさらに活動内容を深めることにつながっていることがわかる。彼らは、自分たちが現地で感じたことをもとに、周囲の仲間に伝えたい思いを持ち、訪問後の校内での活動へも非常に積極的に取り組んでいる。
- ・宮古北高校での話し合いのテーマ「震災からの復興」では、グループで相談しながら様々な意見を取りまとめてポスターを作成し、それぞれの班が異なる切り口で「復興」と「これから」について発表した。宮古北高校の生徒からは「被災者の立場になって、真剣に自分たちの復興の在り方について考えてくれて有り難かった」、「自分たちでは思いつかないようなアイデアを出してくれた」、「プレゼンテーション能力が高くて驚

いた」といった感想が出されていた。互いに立場が違うことでいろいろな意見が飛び出し、両校生徒にとって大きな刺激となり、協力し合って現実の問題を考えることができた。

- ・みやっこベースの企画コーディネートによるスタディツアーは昨年から継続できている。今年は、高速道路のトンネル工事施工の方、震災で夫を亡くした後にハーブ園を立ち上げた方、地元で新鮮なタラフライを提供している方の話を聞き、現地の人との新たな交流が生まれ、参加生徒たちも多くの刺激を受けた様子であった。
- ・今年度は、訪問プログラムに参加した生徒が全校礼拝の場でメッセージを伝える機会を持つことができ、同じ日の昼休みに行われた報告会へとつなげることができた。さらに大学生と共に話し合う FOR 会、大学短大生とともに製作にかかわった壁画プロジェクトなど、訪問プログラム以外でも宮古との交流活動に広がりや深みが増しつつある。訪問生徒以外の多くの生徒たちへ伝える活動によって、間接的な体験による影響も生じている。
- ・被災地では災害公営住宅に入った方々の間での交流が以前より希薄になってしまっており、現地の方と生徒との交流だけでなく、現地の方同士が交流する機会を設けられたのは良かった。生徒が自ら企画し、現地の方言を取り入れたゲームなどで共に楽しみながら交流を深めることができた。打ち解けた中でその後の談話にもつながった。

【今後の課題と展望】：

- ・今年も訪問プログラム希望者が定員を超え、選考を行った。申し込みをして参加できなかった生徒も文化祭において宮古北高校の生徒と多少の交流はできたが、現地訪問せずともできる活動をさらに広げていけるとよい。
- ・仮設住宅や現地の住民の方との交流には社会福祉協議会から多くの協力を得ているが、こちらからの要望にも対応してくれるありがたい関係を今後も継続的に維持できるとよい。
- ・本校文化祭での交流では、できるだけ生徒の意見を活かして宮古の高校生との交流を行っているが、チャリティー販売以外の部分についてはさらに検討が必要である。昨年までテーマを決めて話し合いを行っていた時間帯を個別のアテンドによる文化祭の見学、体験におきかえて交流を深める予定であったが、本校生徒が文化祭で他の活動に忙しく十分な時間を確保して一緒に行動することができなかった。
- ・今年度は青山学院女子短期大学の学生が企画したイベントの手伝いを行ったが、女子短期大学は来年度以降の学生を募集しないため、大学新学部にこのような活動が受け継がれることが期待される。
- ・卒業後も宮古に関わる活動をしている青山学院大学の学生による高等部生への影響も大きい。震災から年月が経つうちに学生団体への加入者も減り、活動が減りつつある。今後、彼らの高等部生への協力が継続されるかが懸念される。

【フィリピン訪問プログラム】

活動概要

【報告者】：相良昌彦(聖書科)

【担当】：藤本晃裕(地理歴史科)、相良昌彦(聖書科)、Scott Carroll(英語科)

【日程】：2018年1月～2019年3月(昨年度より継続中)

【参加者】：現地プログラム参加者(研修生徒)8名、学内SGHプログラム参加生徒、フィリピンプログラム既参加学生(大学生等)※事後プログラム

【背景】：

青山学院各設置学校はそれぞれ、認定NPO法人チャイルド・フアンドジャパン(以下CFJ)の教育支援プログラムを通してフィリピンの子供たち(チャイルド)との関係を持っている。訪問を通して顔と顔を合わせ、与えられた出会いの中で互いに語り合い、チャイルドたちの環境や現実と自分たちの社会のそれとを改めて見つめ直し、続けてきた支援の意味を深める必要がある。

【目的】：

- ① CFJの協力による現地訪問では支援している子どもたちと直接対面する出会いを持つ。さらに出会いによって生まれる心の繋がりを大切に、交流、対話を通じて視野を広げる。
- ② 事前学習によって貧困問題の社会的・構造的理解を深め、各々の学びの課題を設定しながら続けている支援の意味を学ぶ。
- ③ ①の出会いを原体験として、事後学習を通して研究課題の学びを深める。広い視野と豊かな心を持って自分が属する社会について、また訪問地や国際的な社会についての理解を深め、与えられた関係性の中にある問題や課題に取り組む。現在与えられている環境の中で果たすべき責任を自覚し、国際的に貢献できる人材を育成する。
- ④ 全校生徒に学校としての取り組みや個々人の経験を伝え、学びを起こす。また幼稚園から大学院までの総合学園としての青山学院の環境の中で、高等教育プログラムの研究や学びへと接続する。

【内容】：

- 貧困の構造的問題、必要とされる適切な支援についての事前学習日程

1月10日	LEGOブロックを用いた冬休みの課題図書発表
1月17日	アイスブレイク、チームビルディング、KJ法による課題設定 【課題報告】貧困×衛生問題
1月25日	【課題報告】貧困×ジェンダー
1月29日	【課題報告】貧困×国際政治
2月8日	【課題報告】貧困×教育
2月22日	【課題報告】ゴミ問題と労働問題について



2月26日	CFJ 訪問、オリエンテーション
3月8日	初等部との合同準備会(貿易ゲーム)
3月9日	初等部との合同準備会(課題報告)
3月12日	英語トレーニング、インタビュー練習
3月13日	英語トレーニング、直前オリエンテーション

● 現地訪問と支援チャイルドとの交流

フィリピン訪問日程(3月21日～26日)

3月21日	移動日(成田 → マニラ → イロイロ)	
3月22日	訪問地域①Immanuel Rural Development Center* (1988年設立 イロイロ州)	
3月23日	訪問地域②Community Partnership for Integrated Child Development Center* (1996年設立 ギマラス島)	
3月24日	訪問地域③Sacred Heart of Jesus Family Helping Center* (1996年設立 カピテ州)	
3月25日	初等部・高等部合同ミーティング、マニラ市内見学	
3月26日	移動(マニラ→成田)	

*各センターは CFJ の地域支援センター

【活動内容】

- ①各センターにおいての出会いの経験を持った。
- ②各地支援センターの活動内容、それぞれの固有の取り組みの課題を学習した。

[支援チャイルドとの交流、地域訪問、家庭訪問、共同体の働きに関するインタビューなど] 約1週間の滞在を通して、現地の子供たちの生活や教育を支える各地の支援センターが抱える課題や取り組みに触れた。子供たちへの教育支援、訪問した子供たちの家族の生活、地域共同体の経済的かつ社会的自立を目標としたコミュニティ支援活動の理念、センターの運営方針などについて、現在から将来に至る具体的な目標と取り組みを詳しく学んだ。振り返りの時間の共有を通して、合同プログラムであることを活かして初等部・中等部・高等部それぞれの視点からも、課題研究の視野を広げた。

事後学習：レポート、各イベントでの報告・発表、毎週1回ミーティングを実施

● 事後学習・各イベント日程

4月11日	全校対象 SGH オリエンテーションにて訪問報告・発表
4月12日	【フィリピン訪問振り返りミーティング】 初等部でのファミリーフェアへの参加、グローバルウィークに向けたプロジェクトの策定など、今後の活動方向についての話し合い

4月26日	LEGOブロックを用いた、冬休みのフィリピン訪問後の「フィリピンのイメージ」の分かち合い
4月27日	CFJ事務所訪問 プログラムを通じて得られた学びや疑問の報告、ディスカッション
5月26日	初等部ファミリーフェア(一般公開行事)でのフィリピンブースへの参加 チャリティー物品販売・取り組みについての説明と体験の共有
6月19日 22日	グローバルウィークIでの礼拝の奨励、「グローバルショーケース」での発表、フィリピン支援チャイルドと関わり、貧困について学ぶワークショップ、「貿易ゲーム」の開催 ※詳細は【グローバルウィーク】を参照
9月15日 17日	文化祭での「フィリピンプログラム報告部屋」での展示・活動報告・チャリティー販売
9月23日	青山学院同窓祭“Green Festival” (青山学院全校校友会の日)でのプログラムテントにおける活動報告・学びからのプレゼンテーション、チャリティー販売 今年度参加生徒・現青山学院大学学生(卒業生・元参加者)
10月3日	グローバルウィークIIでの活動報告・フィリピン訪問プログラム説明会 詳細は【グローバルウィーク】を参照
12月1日	SGH成果報告会での発表

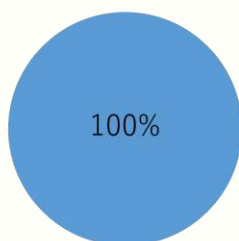


【検証】:

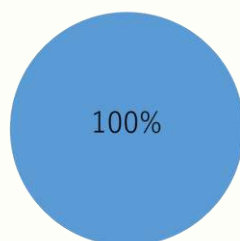
プログラム実施後、訪問プログラム参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

1. このプログラムに参加したことによって、以前より経済格差などの問題について考えるようになった。
2. 直接関わりがない人や他国のことであっても、どこかで自分に繋がっていると思う。
3. 将来、日本や海外で、世界の様々な問題や状況に繋がって生きていきたいと思う。

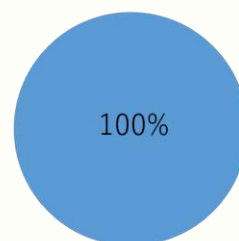
1.



2.



3.



【評価】: A

- 高校生としての自覚と責任をもって、授業や文化祭の中での報告や発表、グローバルウィーク等のプログラムを通して、学内での認知度を高める貢献をしている。
- 支援チャイルドを増やし、生きた関係の中で繋がりを持つことに賛同する高等部

生徒が増えてきている。2回のグローバルウィークや文化祭等を通して行われる、参加生徒から全校生徒へのフィードバックの充実、参加者の意識の変容は顕著である。

- CFJ 東京オフィスへの訪問を続け、それぞれの研究テーマを見つめ直し、これからの活動を見直す機会も継続的に与えられている。
- 貧困地域に住む支援児童生徒との交流を通して、世界の中の経済格差問題に関する認識を深め、次年度に向けて学内外の諸団体と関係を築き始めている。
- 課題の解決や訪問地との関係継続のために、プログラム参加者をメンバーとする有志団体が大学ボランティアセンターとの関係の中で成立した。高等部同窓会、青山学院校友会からも活動に対する賛同と支援を与えられている。(団体名 UBE：現地の産物、紅山芋の意)

【今後の課題と展望】：

今回も参加生徒たちには自分たちの学びの原体験となる、チャイルドたちとの直接の出会いが与えられた。現在はその出会いによって生まれた関係を広げ、深めるために設定した課題を、現地での体験や事後学習を通して再確認し、深めていく過程にいる。訪問から帰った次の年度内(今年度)には各 SGH プログラムやイベント、プレゼンテーション等の機会を通して、チャイルド一人一人の環境や現実におけるこれからの課題、チャイルドの生きる地域共同体や社会または国としての問題について学び、日本の高校生として自分たちの社会でのローカルな課題にも目を向けていこうという事後の学習が続いている。

フィリピンから届く様々なニュースにも敏感になり、地域おこしや外国資本の導入によるインフラ整備などの政策や事業の進捗状況に触れる度に、新たな視点をもって考察をおこなっている。今後、与えられたチャイルドとの出会いという原体験を風化させず、いかに他者と共生していくのかという課題を再設定していくことが求められている。高校生として、あるいは自分の属するコミュニティの一員として、具体的に責任を負う関与のあり方を模索し、授業や本プログラムの中で発展的に思考を深めていくことが期待される。

学校の中で継続的かつ具体的な取り組みを進めていくことも必要である。「One Class, One Child」という、支援チャイルドとの繋がりをより多く持とうという呼びかけが始まっている。幼稚園から大学院までの一貫教育を軸にする青山学院であるからこそ、高校から大学・大学院へと続く学びの中で、これからの社会に活かされ貢献するための視野を育てることが可能になる。本プログラムを青山学院全体の取り組みとして展開していくべく、高等部卒業後もプログラム参加者がその経験を高等部生の学びに還元できる姿勢と体制を養っていききたい。



【都内案内アテンドプログラム】

活動概要

【日程】：2018年3月31日

【参加生徒】：生徒14名、青山学院大学地球社会共生学部のタイ人留学生9名、
ベトナム人留学生1名

【場所】：本校～青山トンネル～渋谷駅～センター街～松濤地区～代々木公園

【担当者】：Dean Kelleher、藤井徹也(英語科)、保屋野誠(地理歴史科)、相良昌彦(聖書科)

【目的】：東京オリンピック・パラリンピックを2020年に控え、さらに大勢の観光客が訪れる渋谷周辺がどのように変わっていくべきか、実際に海外からの留学生と歩いて、発見したことを話し合う。

【内容】：

- 留学生と生徒を混合グループに分け、グループごとに注目したポイントを持って、渋谷・原宿エリアを見て歩いた。
ポイント：外国や異文化圏の方(宗教的な面を含む)の視点
障がいのある方(車いす、松葉杖、視覚障がい)
※歩行障がいのある方の視点
防犯・防災(自然災害、未成年者の安全配慮、キャッチ等)の観点
環境問題(ゴミポイ捨て、大量消費、ex：観光地・繁華街に集まる人が
どういった問題を生じさせるか)
- 帰校後、KJ法を用いてグループ別にディスカッションを行った。
- グループごとに注目ポイントを持って見て歩いた結果見出された、日本の良い点は
どういったところか、改善すべき点はどういった所かについて、アジア圏の他国と
の比較を交えたプレゼンテーションをおこなった。



【生徒の感想】

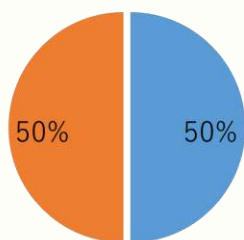
- 自分の国の慣れ親しんだ渋谷・原宿を散策してみて、この国でなされている多くの取り組みについて身をもって知ることができた。異国の人と社会について考えることは、その国との比較によって普段私たちが当たり前としていることが実は1つの文化であることに気付かされるなど新たな発見につながると思う。私たちの住む街が、自分たちにとっての快適さはもちろんだが、国際化に対応するためにはいかに観光客が訪れやすい街であるかということが大きな鍵を握っていると思う。オリンピック開催も間近に迫っているので、より良い都市開発をすることが日本の国際レベルを評価してもらえることにつながると思った。
- 今まで、様々な言語のインフォメーションがあるので、東京は充分インターナショナルな街だと思っていました。しかしこのツアーで、日本ではゴミがあまり落ちていなかったり、道は左右に進む方向を分けたりなど、街が日本独自の習慣で成り立っていることが分かりました。その習慣に従えない外国人がいるのは当たり前で、街を習慣だけで成り立たせるのではなく、全ての人がルールを理解できるように改善しなければいけないと感じました。

【検証】

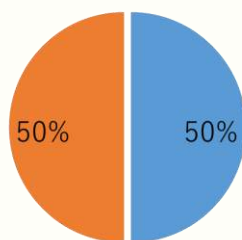
プログラム実施後、参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

1. このプログラムに参加して、普段見過ごしがちなことにも疑問を持ち様々な場面から問題をみつけることができた。
2. 普段、自分が「当たり前」だと思っている事とは違う考え方や物事の捉え方を学ぶことができた。
3. 自分とは違うグループや境遇の人たちの考え方を認めることは大切だと思う。

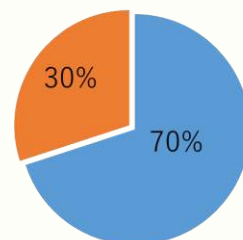
1.



2.



3.



■ 大いに当てはまる ■ ある程度当てはまる
■ あまり当てはまらない ■ 当てはまらない

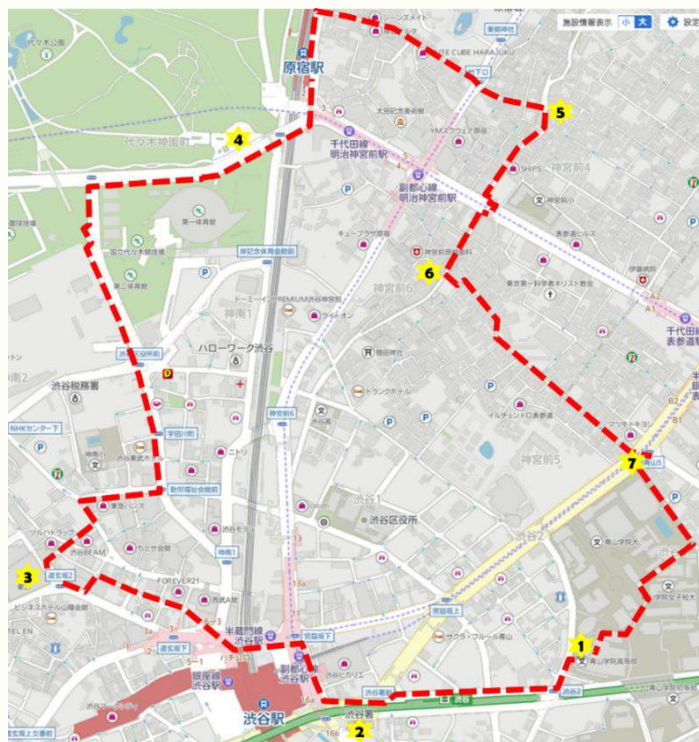
【評価】：B

青山学院大学の留学生とともに一日を過ごす中で、現地調査、ディスカッション、発表までを終えることができるコンパクトな企画を提供している。短時間に様々なことを行わなければならないため、消化不良を起こしている生徒も見受けられた。しかし、留学生たちは相模原キャンパスの地球社会共生学部の学生であり、この地域に不慣れであるため、生徒が紹介して歩くのにはちょうど良い「外国人訪問者」の役割を担ってくれている。

【今後の課題と展望】

3回目を迎え、アテンドツアーでたどるルートは確定した。短い時間の中でそれぞれのグループが視点を絞ることによって、発表の際にお互いの気づきを紹介できるように工夫した。今まで行ってきたほかのパターン(観光ウォーク(渋谷・原宿の商業地としての発展)、開発・発展の歴史ウォーク)と組み合わせ、近隣の他校においても実施ができるようなブックレットにまとめていきたい。

参加生徒には早い段階でテーマを伝え、留学生にある程度十分な説明ができるよう、準備をさせていきたい。



【カナダホームステイプログラム】

活動概要

【日程】：2018年7月26日～8月8日

【参加生徒】：29名

【場所】：カナダ オンタリオ州 ベリー市近郊

【担当】：藤田和、Dean Kelleher(英語科)

【目的】：

ホームステイを通じて文化の異なる背景を持つ人々と知り合うことによって、世界観の拡張、異文化に対する柔軟性を促す。

ホストファミリーとの生活の中で、日頃の学校生活で学んだ英語力を試す。

また多様性の中で生きる現地の人々との交流からその受容について学ぶ。

【内容】：

- 現地のホストファミリー宅に滞在しながらさまざまな観光地を訪ね、カナダの自然および文化に触れた。
- YMCA デイケアセンターや老人ホームを訪問して現地の人々との交流を深め、日本文化を伝えた。
- 市内観光の際には同年代のバディとの交流を行った。

カナダホームステイ日程

7月26日	ウェルカムレセプション、ホストファミリーと対面
7月27日	・カナダ・モンテッソーリ・デイケアを訪問。 ・ベリー市のダウンタウンを訪問 ・カナダの重要な美術品が所蔵されるマクラーレンアートセンターを見学。 ・ベリー市のシティホールにてベリー市長面会
7月28日・29日	ホストファミリーと共に過ごす
7月30日	・ナイアガラ滝の見学
7月31日	・The Wye Marsh Centre(自然保護区の湿地帯)を訪問 ・St. Marie among the Hurons 訪問："サンタマリー博物館村"で17世紀フランス イエズス会のカナダ入植の歴史を学ぶ
8月1日	・トロント市内観光 - トロント大学・CNタワー等の見学
8月2日	・老人ホーム訪問：ボランティア活動、日本の文化紹介と交流 ・フェアウェルパーティ
8月3日	・コリングウッド洞窟観光 ・ブルーマウンテンでのアクティビティ
8月4日～6日	ホストファミリーと共に過ごす、インタビュー課題の実施



【生徒の声】

- プログラムに参加したことで本当に多くの人の温かさに触れ、人との関わりの中で「国の違いなど大した問題ではない」ということを感じました。また同時に、やはり自分にはもっと高い英語力が必要だということを再確認しました。英語を話せれば自分の世界も大きく広がるし、新しい言語を学んでいくことは必要なことだと思います。しかし、それを単に学校の教科として学ぶのか、自分の中で何か明確な目的をもって学ぶのかによって、得るものの大きさは変わってくると思います。私はこのホームステイ中、相手の言っていることがわかっているのに答えがまとまらなかったり、感謝の思いもうまく伝えきれなかったりと、もどかしさや悔しさをたくさん味わいました。また、異文化を持つ人たちと関わることがどんなに楽しいか、身をもって知ることができました。時には大変なこともありましたが、これらの経験は、私にとっての英語を学ぶ目的を見つけさせてくれました。私は、いろいろなバックグラウンドを持った人達ともっと自由にコミュニケーションをとれるようになりたいので、英語を身に付けたいと思います。そしてまたいつかカナダに行って、ホストマザーやその他のお世話になった人たちと一緒にたくさん話せたらいいなと思います。カナダで過ごした2週間は、自分の人生の中で本当にかけがえのない時間になりました。
- カナダの多様性や、現地の高校生とコミュニケーションをとれたことによって自分の世界に向けての視野が大いに広がったと思います。今後も自分がいる場所の常識をあたり前と思わず、世界には色々な文化や伝統があるということを忘れずに毎日を過ごしていきたいです。
- 失敗は恥ずかしいことではなく自分自身を向上させるためのものであるとわかった。今後は何事にもリスクを恐れず取り組みたい。
- このプログラムに参加しようと思ったのは、英語力を上げたかったのと文化の違いに触れてみたいと思ったからです。ホームステイの2週間ではどちらも経験出来ました。身の回りの何もかもが英語という環境に置かれたのは初めてだったので、わからないことだらけでした。ホストファミリーにわからないことを聞くときに、完璧な英語でなくても伝えたいという気持ちが芽生えて、コミュニケーションの取り方を学ぶことができました。以前は英語を話すことに対して重くとらえすぎていましたが、今では英語を発することへの抵抗心のようなものが消えました。今後も英語をたくさん話して力をつけていきたいです。

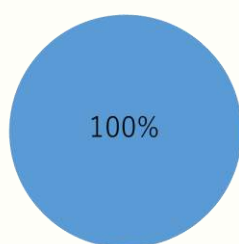


【検証】：

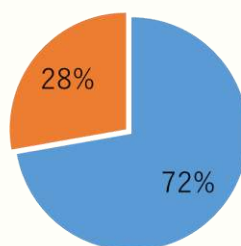
このプログラム実施後、訪問プログラム参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

1. このプログラムに参加したことによって、文化の多様性について学ぶことができた。
2. うまくコミュニケーションが進まない時、新しい方法を取り入れたり、工夫して接することが出来た。
3. 自分とは違う国やグループの人たちの考え方を認めることは大切だと思う。

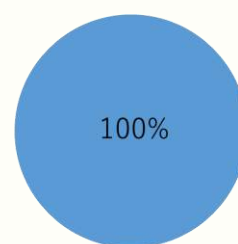
1.



2.



3.



■ 大いに当てはまる ■ ある程度当てはまる
■ あまり当てはまらない ■ 当てはまらない

【評価】：A

「このプログラムに参加したことによって文化の多様性について学ぶことができた」と答えている生徒の割合は 100%(全員)である。つまり、このカナダホームステイが生徒個人の世界観を拓けると同時に、異文化に対する受容の精神を育むことの一助になっていることは間違いない。これは「自分とは違う国やグループの人たちの考え方を認めることは大切だと思う」と答えた生徒がやはり 100%(全員)であることから明らかである。また、英語でのコミュニケーションにおいて、失敗は経験の一つだと捉えられるようになった生徒もいる。事実、「うまくコミュニケーションが進まない時、新しい方法を取り入れたり、工夫して接したりすることが出来た。」と答えた生徒は約 7 割にも及び、前向きにホームステイを過ごした生徒が多いことがうかがえる。

【今後の課題と展望】：

本プログラムは、初めて海外へ出る生徒でも現地の人たちと交わり、有意義な学びができるように意図されたものであり、今年度は 7 月 26 日から 8 月 8 日にかけて実施された。

前述した生徒のコメントやアンケート結果からもわかるように、参加者たちは文化の多様性を学ぶとともに、自分とは異なる国や集団に属する人たちの考え方を理解し、認めることの重要性について認識を深めたようである。また同時に、英語を通して自分の意見を発信していくことの大切さを、経験を通して学んだと考えられる。

このように基礎的な異文化体験プログラムとして大変有意義な本プログラムであるが、今後は「異文化体験」だけでなく、現地の大学の授業などに参加するなど、英語を通した「学習」のプログラムを導入していくことを検討してもよいかもしれない。また、現在は参加人数も少人数に限られているが、より多くの生徒に本プログラムに参加してもらい、異文化受容の素地を幅広く醸成していきたい。



【English Camp(多文化共生キャンプ)】

活動概要

【日程】：2018年8月27日～8月29日

【参加生徒】：16名

【場所】：軽井沢 追分寮

【担当】：Spencer Fancutt、Dean Kelleher、藤井徹也（英語科）、他2名

【目的】：

- 本校の所有する校外施設を用い、様々な文化/社会的価値観を持つ人たちとの共生を考える。
- 複数の留学生とともに数日間を過ごすことによって、個人の世界観を拡張し異文化に対する偏見を除去する等、生徒の成長を促す。
- プラスチックによる環境問題やフェアトレードの実態等をセッションの中で学ぶことによって、世界が抱えている現実の問題に目を向け、その解決策を考える機会を提供する。
- 更に広いグローバルな視点と、グローバル社会への志向性を強める。

【内容】：

- 日常会話を含め、全て英語で過ごした。
- 青山学院大学に留学中のルワンダとイギリスからの留学生、本校に在学しているオーストラリアの留学生によるプレゼンテーションとアクティビティセッションを行った。
- プラスチックによる環境問題とフェアトレードに関する事前調査・ロールプレイ・議論・発表を行った。
- フェアトレード活動で東ティモールを訪問した教員によるプレゼンテーションを実施した。
- キャンプ終了後、課題を実施した。
 - ① Write what each topic made you think more deeply about.
 - ② Write what can we do for plastic pollution.
 - ③ Tell us why you recommend or don't recommend English Camp.
 - ④ How can English Camp be improved for next year?

【生徒のレポートより】 ※一部抜粋

◆Write what each topic made you think more deeply about : Fair trade

I think that Fair Trade has a philosophy of trading at a reasonable price with people in developing countries. When discussing in the group, producers are the most important and difficult, so many opinions have come out that the ratio of cost should be highest. In fact, however, I noticed that



producers had to work at the cheapest wages as normal and it was a serious problem. Here we go back to the position of consumers and think about Fair Trade. Fair trade must be a perception that it is a good initiative for developing countries. However, I think that Fair Trade has an idea that it is a special effort for developing countries. In fair trade, I felt that it is as important as spreading such awareness, as it is only a matter of course that it is commonplace. I thought that it is necessary to understand well that there are shops selling like fair trade products as if they were all fair trade products just like Starbucks.

◆ Write what can we do for plastic pollution

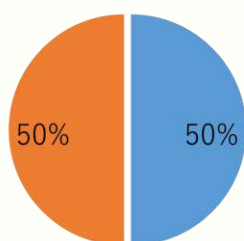
I think that we can reduce plastic pollution at my school. For example, we use water server instead of to buy PET bottles. We also bring our lunch without plastic productions. We can put a rice ball in a case instead of wrapped it. We can reduce any number of plastic pollution just a little conscious of everyone.

【検証】：

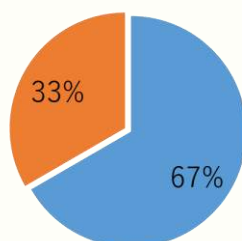
このプログラム実施後、訪問プログラム参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

1. このプログラムに参加したことによって、文化の多様性について学ぶことができた。
2. 直接関わりがない地域や人のことであっても、どこかで自分に繋がっていると思う。
3. 自分とは違う国やグループの人たちの考え方を認めることは大切だと思う。

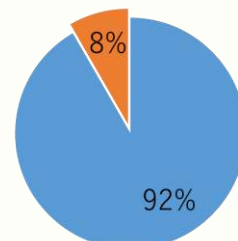
1.



2.



3.



■ 大いに当てはまる ■ ある程度当てはまる
■ あまり当てはまらない ■ 当てはまらない

【評価】：B+

I was extremely pleased with the eagerness and focus with which students approached our new tasks. In contrast to the previous camps, the keynote study session was far more student-centered and accessible for students. The new focus on Plastics Pollution saw students work through a 4-step program: Discover, Report, Collaborate, and Present. Using tablet technology, students watched a variety of short videos on different aspects of the problem and took notes which they

then reported to the group in order to prepare a presentation. Students were so engaged in the tasks that we extended the sessions to allow time for more research. Final presentations included proactive practical solutions to the problems studied which showed real desire for change.

Another area, which showed unexpected promise was the ‘cup song’ which students were supposed to practice for a fun evening English physical activity. In reality, the students practiced in every available moment, and the friendly connections and rapport that the simple activity encouraged surprised staff and greatly contributed to a community atmosphere which improved the whole camp.

【今後の課題と展望】：

Firstly, the benefits of the camp involving new learning environments, experiences and language practice seem to have been recognized by all participants. Secondly, the enthusiasm to carry learned material into practical application after the camp, suggesting a change in mindset, came through clearly in the comments. Our guests from Rwanda and the UK gave students insights that are not possible during school lessons. In particular this year, a university exchange student from the UK brought a fresh perspective on national stereotypes being born to Thai parents and raised until school age in Thailand. Our Rwandan guest, raised partly in the US also showed students the heterogeneity of true internationalism.

The positive feedback concerning the chat leaders and helpers used at the camp have encouraged organizers to seek more assistants for next year’s camp. Especially the use of AGHS graduates with international experience presented realistic models for participants.

A clear lesson from this year’s camp concerns the level of engagement of students in tasks. Previous topics have focused on global issues with which students have struggled to relate personally. This year’s focus on plastics use and pollution seemed more immediate and students reacted accordingly. Students frequently voiced examples of how they could tackle the issue at home and their interest in the material changed their focus from English vocabulary and grammar to using English as the vehicle of their thoughts. It will be important to further capitalize on this aspect when choosing new topics.

Again, aims for development/extrapolation of material learned at the camp were again thwarted by the demanding second term schedule and the focus on Global Week activities. This seems to be an insurmountable obstacle and a rethinking of goals needs to take place. There seems to be little time during the camp for development of projects, so perhaps a greater integration with established school projects/clubs will be necessary if progress is to be made on a ‘next step’ following the camp.



【短期交換留学プログラム】

活動概要

【報告者】：田辺博史(英語科)

【担当】：田辺博史(英語科)

【参加者】：各校参加生徒 ※詳細は各校ごとに記載

【目的】：

異なるバックグラウンドを持つ人々との交流を通して、生徒の世界観の拡張と異文化に対する偏見の除去を目指す。

様々な文化・社会的背景を擁する同世代との積極的な意思疎通を通して、お互いの違いを認識しつつ相手の長所を認め、自分の意見を積極的に発信することができる人材を育成する。

【内容】：

海外からの各校代表交換留学生の高等部迎え入れと本校生徒の訪問

- イギリス リーススクール (The Leys School)
- イタリア レニャーニ校 (Liceo Classico S.M. Legnani)

◆イタリア レニャーニ校

お互いの家にステイしながら学校に通い、異文化を体験することを目的として 2016 年度から開始したレニャーニ校との交流は、今年度も双方の生徒に大いに学ぶ機会を与えつつ、無事に終了することができた。イタリア訪問の前に行われた毎週の準備会においては、基本的なイタリア語会話の練習、現地で日本語授業を担当する際の教案・教材づくり、日本の文化に関するプレゼンテーションの準備・練習などを行った。また、訪問にあたり予め課題を設定しておき、その課題について現地の教員・生徒・ホストファミリーなどにインタビューなどを行い、帰国後にそれらについて英語で報告し、文化の違いの根幹に何があるのかを考えた。



【研究日程】：

① レニャーニ校への訪問 2018年3月21日～4月3日

日程	場所	担当	参加生徒数
2018年3月21日 ～4月3日	イタリア レニャーニ校 他	藤井徹也・田辺博史・Spencer Fancutt (英語科) 他3名	10名
活動概要			
○ 滞在期間中は、生徒が自ら選んだトピック(迷信の違い、宗教観の違い、道徳心の違いなど)についてのアンケートを高等部・レニャーニ校それぞれで実施し、その結果を踏まえて文化の違いの根幹に何があるのかを考えた。共生する社会の実現を考える際の大きなヒントを得ることができた。 ○ 近郊のミラノ、ベルガモ、コモ湖など様々な場所へ出かけた。レニャーニ校の教員が美術・歴史・地理などを英語で説明をしながら引率してくださり、理解を深めた。			

② レニャーニ校の高等部への迎え入れ 2018年9月8日～9月21日

日程	場所	担当	参加生徒数
2018年9月8日 ～9月21日	青山学院高等部 他	田辺博史・Spencer Fancutt (英語科) 他3名	12名
活動概要			
○ レニャーニ校から12名の生徒を迎え入れた。 ○ 通常の授業日の午前中は、英語・書道・体育・美術などの授業に出席し、できるだけ多くの生徒と交流を持つ機会を作った。午後は教職員が都内の名所を案内し、日本への理解を深めてもらった。 ○ 来日期間には本校文化祭が含まれ、レニャーニの生徒たちはイタリア文化紹介やミニイタリア語講座などを2日間にわたって行った。高等部生だけでなく、外部のお客様にもイタリアの文化と言語について学びを深める機会を持てたことができた。			

③ レニャーニ校への訪問 2019年3月23日～4月6日 予定

日程	場所	担当	参加生徒数
2019年3月23日 ～4月6日	イタリア レニャーニ校 他	田辺博史・Spencer Fancutt (英語科) 他3名	11名
活動概要			
1月以降、毎週木曜日の昼休みに準備会を持った。基本的なイタリア語会話の練習をするとともに、日本文化のプレゼンテーションの準備、日本語授業の準備、現地でのインタビュー課題の作成などを行った。3月に現地に赴く際には、午前中は授業を受け、午後は2時に学校が終わるため、近郊のミラノ、ベルガモ、コモ湖への散策などを行う予定である。また、日本で準備した質問を元にホストファミリーやレニャーニの生徒たちにインタビューを行い、それらを踏まえて討論会などを行い、帰国後に報告会を行う予定である。			

<訪問課題>

- 文化・習慣・社会・言語・宗教・政治・環境などの中から事前に興味のあるトピックを選び、質問事項またはアンケートを作成する。現地でホストファミリーやレニャーニの生徒たちにインタビューまたはアンケートを行い、それに基づき討論会などを行う予定である。帰国後は報告会を行う。

【生徒のレポートより】※一部抜粋

- たくさんの人が音楽を聴くことで何が実現できるか、という問いの答えが日本の生徒とイタリアの生徒とで大きく違っていました。多くの日本人は「言葉の壁を超えて同じ感動や気持ちを共有できる」と答えたのに対し、イタリア人は「音楽を聴くことで自分を表現することができる」と答えてくれました。まわりとの関係より自分のため、というところに国民性の違いを感じました。
- 自分のプロジェクトは「日本の学校制度について」だったのですが、聞いていくうちに、レニャーニ生は自分たちの教育に対して大変さは感じながらも、誇りに思っているように見えました。例えば、「ものすごい量を一週間に覚えなきゃいけない。すぐ忘れちゃうんだけど将来どこかできっと使えると思うんだ」と最後ポジティブに捉えている人が多かったです。実際英語力がとても高い学校だったので、結果がしっかり出ているのも要因の一つだと思います。また、“詰め込んですぐ忘れる”や、“学校で寝てしまう”など、学生のやってしまうことは同じなのだなと思いました。



◆イギリス リーススクール

ケンブリッジにあるリーススクールと、2週間ずつのホームステイをしながらお互いの学校に通うプログラムを実施している。今年度で23年目となる両校の関係も円熟してきた。リース校では日本に関心を持つ生徒も増えているようであり、今年は例年より多く6名の生徒が本校を訪れた。

【研究日程】：

④ リーススクールの高等部への迎え入れ 2018年10月20日～11月3日

日程	場所	担当	参加生徒数
2018年10月20日 ～11月3日	青山学院高等部 他	田辺博史・Dean Kelleher (英語科) 他3名	6名
活動概要			
○ リーススクールから6名の生徒(男子3名、女子3名)を迎え入れた。 ○ リースの生徒たちは、通常の授業日の午前中には英語・書道・体育・家庭科などの授業に参加し、多くの生徒と意見交換などを行った。午後は担当教職員が都内の名所を案内した。また、放課後には茶道部の協力のもとに tea ceremony を体験したり、バディと都内散策などを行ったりした。 ○ 来日期間中に、International Sweets Festival を実施し、本校に在籍中の台湾・ベルギー・タイからの長期留学生を交えて、自国の紹介クイズをしながら多くの生徒と交流を深めた。クイズに正解した生徒には各国のお菓子が配られた。			

⑤ リーススクールへの訪問 2019年1月5日～1月19日

日程	場所	担当	参加生徒数
2019年1月5日 ～1月19日	イギリス リーススクール 他	田辺博史・Dean Kelleher (英語科)・宮腰かほり(SGH アドバイザー)	6名
活動概要			
○ 滞在期間中は学校キャンパス内に併設されている寮にてリースの生徒たちとの共同生活を体験した。 ○ 授業はESOLを始め、英語・地学・生物・演劇・設計デザイン等に参加。また、リーダーシップや責任感・忍耐力などを養うことを目的としたCCFと呼ばれるイギリスならではの訓練の授業では、特別に射撃の授業に参加させてもらい、先生の丁寧な指導のもと実際にライフル銃を手取る体験を得た。 ○ 週末にはバディの家族と共に時間を過ごし、ケンブリッジ市内やロンドンを案内してもらいながら、イギリス文化や歴史について理解を深めた。			

<訪問課題>

All Aoyama Gakuin members must interview at least five people in Leys about the following:

1. What do you know about Japan?
2. What is your image of Japan and Japanese people?
3. As they may know, the 2020 Olympics will be held in Tokyo. Since the number of foreign visitors is increasing yearly, what are some things that need to be improved to help them enjoy their visits to Tokyo?
4. As the 2020 hosts of the Olympics, what are some things that Japanese people should expect and/or need to be careful about?
5. What advice would you give Japanese people when dealing with so many cultures visiting at one time?
6. What are some British proverbs that you know? (For example, in Japan we hide our thumbs when we see a hearse so that our relatives won't die.)

【生徒の声】

- 話が通じなかった時に落ち込むのではなく相手に伝わるまで話したり、話すスピードが速すぎて何を言っているのか全くわからず会話に入れなかった時も耳を澄ませて頑張って聞いたり、自分の分からなさで落ち込むより先に、そんな「できない自分」も受け入れられるようになりました。そうすることで心が軽くなり、笑顔でいられたり、もう一回話してと頼めたり、自分にも相手にも嘘をつかずたくさんの人と本当の関係が築けたと思います。また、イギリス人は今日初めて会った人、お店の人、近くの人によく声をかけたり挨拶をします。私はその文化がすごくうらやましくて、イギリスに行ってたくさんの人に挨拶や感謝の言葉をよく伝えられるようになりました。



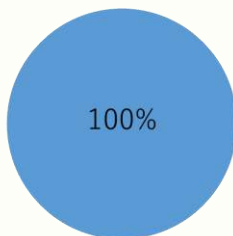


【検証】

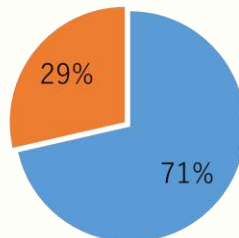
このプログラム実施後、訪問プログラム参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

1. 普段、自分が「当たり前」だと思っている事とは違う考え方や習慣を学ぶことができた。
2. うまくコミュニケーションが進まない時、新しい方法を取り入れたり、工夫したりして、接することが出来た。
3. 自分とは違う国やグループの人たちの考え方を認めることは大切だと思う。

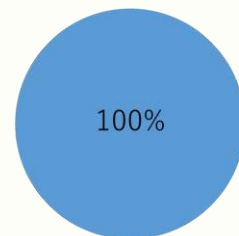
1.



2.



3.



■ 大いに当てはまる ■ ある程度当てはまる
■ あまり当てはまらない ■ 当てはまらない

【評価】：A

このプログラムに参加した全生徒が「普段自分が「当たり前」だと思っていることとは違う考え方や習慣を学ぶことができた」、「自分とは違う国やグループの人たちの考え方を認めることは大切だと思う」と答えている。このことから、この短期交換プログラムは生徒の世界観を広げ、異文化を受け入れる素地を育むことに大いに貢献したと考えられる。また、「うまくコミュニケーションが進まない時、新しい方法を取り入れたり、工夫して接したりすることが出来た」と答えた生徒も過半数にのぼり、昨年(3割程度)の割合に比べて大きく前進しているといえる。事前に行った週1回の準備会での英語の練習がこの結果に大きく寄与しているものと考えられる。

【今後の課題と展望】:

レニャーニ校からは12名の生徒が9月に来日し、青山の生徒との交流を行った。また、こちらからは11名の生徒たちが3月の春休みにレニャーニ校を訪問する予定である。その際には、文化・習慣・社会・言語・宗教・政治・環境などの中から生徒たちが興味あるトピックを選び、自分でインタビュー課題を作成し、現地でホストファミリーやレニャーニの生徒たちにインタビューを行う予定である。

通常の日本社会ではイタリアの文化と触れ合う機会はあまり多くない。その点において、イタリアの生徒たちからイタリアの文化・社会・習慣などを直接的に学ぶことができるこの交換プログラムは特に大きな意味を持つと思われる。

今年度は、イタリアと日本の生活習慣・文化の違いから、ストレスを大きく抱えた生徒もいた。来年度以降、それらの違いを事前に十分に認識する機会を持ち、柔軟な心構えをもってイタリアの生徒を迎え入れる必要がある。また、イタリアの生徒たちには英語だけでなく日本語による授業にも参加してもらい、イタリア語と日本語、2言語による交流を持つ機会をより多く作ることも必要であろう。こちらからの訪問時にも英語またはイタリア語での交流だけでなく、日本語も使いながら日本の文化・社会・習慣などを伝えていければ、より充実した双方向性の交流になると思われる。

リーススクールからは6名の生徒が来日し、午前中は英語を中心とした授業に参加し、午後は都内の散策を行った。こちらからも6名の生徒がリーススクールを訪問し、バディとなる生徒たちとリースの授業を体験した。

今年度のリース訪問時には、2020年の東京オリンピックを念頭に置き、外国のお客様を日本に迎える際に心がけたほうがよいことなどをリースの生徒やホストファミリーにインタビューする課題を課した。参加生徒たちは今後、これに関するレポートをCoursePowerにアップする予定である。本校の生徒たちはこのような活動を通じて、様々なバックグラウンドを持つ人々を日本に迎える際にどのようなことを心掛けるべきかについて考察をすすめている。

このように英国のパブリックスクールの伝統を受け継ぐリースとの交流は、英語をコミュニケーションのツールとして実践的に使い、お互いの国の文化・社会・価値観などを理解しあう大変良い機会となっている。今後の課題として、レニャーニ同様リースの生徒たちには英語だけでなく日本語による授業にも参加してもらい、より多くの生徒たちと日本語においても交流を持ってもらう活動などを考えていきたい。こちらからの訪問時にも日本の文化・習慣・社会などを、英語だけでなく日本語も使いながら多くのリースの生徒たちに伝えていくような活動を展開していきたい。

【チャットルーム】

活動概要

【担当】：Spencer Fancutt (英語科)

【日程】：2018 年 4 月～2019 年 3 月

【場所】：High School (小教室), Chat Room (Aoyama Gakuin University Campus)

【参加者】：生徒 1188 名

【目的】：Small group chat sessions/ Cultural exchange

【Chat Sessions at the High School】

Small group chat sessions (1-8 students) with native foreign language speakers of university age began at Aoyama Gakuin High School four years ago. Giving students an opportunity to communicate with foreign students, and by doing so learning about other cultural values and differences, the sessions also offer students the chance to practice their language skills or to try a new language.

Sessions at the high school were curtailed this year by staff workloads, which presented a new challenge. We realized that the success of the chat room at the high school depends in great part on staff being able to take on the extra work associated with organizing sessions. We continued to offer Italian to support (and encourage participation in) our exchange program with Legnani School near Milan and have seen very positive results from previous participants wishing to maintain the language skills they gained in Italy.

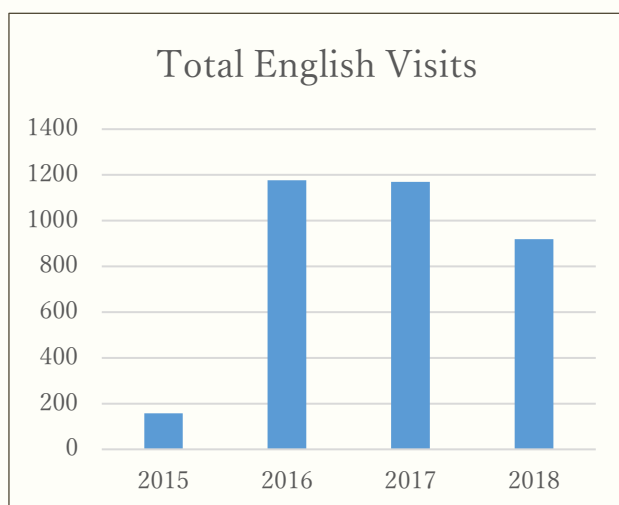
In spite of the reduced numbers of visits for English, Korean and Italian sessions increased in popularity. In addition, English sessions have been added to the calendar for the third term for the first time, and it is hoped that these sessions will make up some ground lost in the second term.

We also were fortunate to have British and Rwandan English Chat Leaders join our Summer English camp this year as well as an Australian exchange student, which helped to diversify our project.

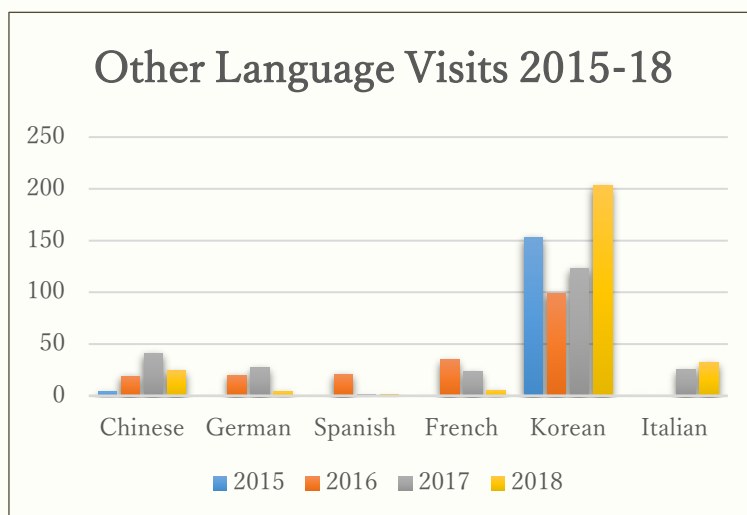
Ten Chat Leaders of various nationalities played an important role in our lunchtime session during the school's Global Week I and II on 'Volunteering' in the spring and on 'Community' in the autumn.

These activities, coupled with continuing support from the Aoyama Gakuin Chat Room, resulted in positive results as detailed below (see Graph (I)(II), Data Set (I)).

(I) Graph of visitor numbers to English Language chat sessions 2015~2018



(II) Graph of visitor numbers to chat sessions 2015~2018 (Other Languages)



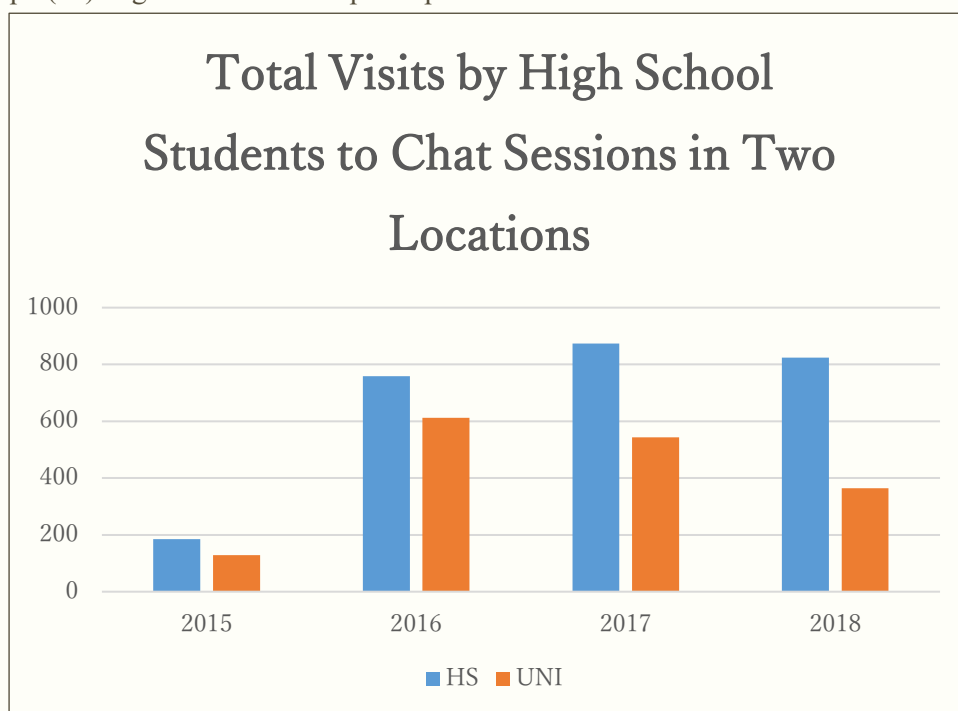
Data Set (I)

	2015	2016	2017	2018
Chinese	4	19	41	24
German	0	20	27	4
Spanish	0	21	1	1
French	0	35	23	5
Korean	153	99	123	203
English	28	565	627	919
Russian	0	0	6	0
Italian	0	0	25	32
Total	185	909	873	1188

【Chat Sessions at the University Chat Room】

As sessions were curtailed in the second term at the high school due to staff workload, third language sessions were introduced for high school students at the university Chat Room. Although overall numbers were down, the increased variety of languages taken was encouraging. Total visitor figures are shown below (see Graph (III), Data Set (II)).

Graph (III) High School student participation in two locations 2015~2018



Data Set (II)

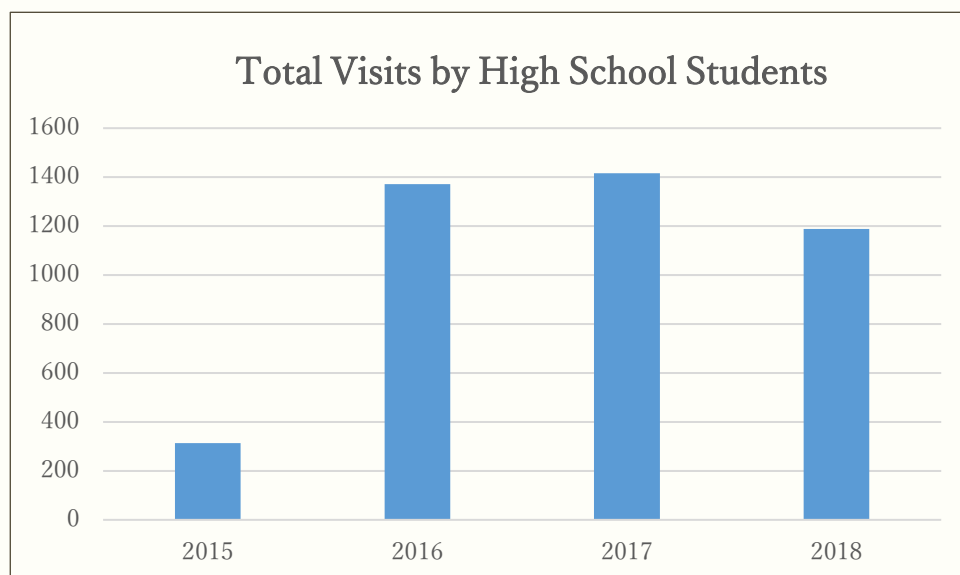
	2015	2016	2017	2018
High School	185	759	873	824
University Chat Room	129	612	543	364



【Conclusion】

The total decrease in Chat Room users (below, Graph (IV), Data Set (III)) has been disappointing, as the previous two years saw such strong progress that the bar was set extremely high. Hopefully, the continued participation of Chat Leaders in the popular English Summer Camp, and the heightening profile of the Chat Room at the High School will result in further participation, although parameters such as room and Chat Leader availability, teacher commitments, and other demands on student time, may have approached close to maximum growth.

Graph (IV) Total Chat Room users 2015~2018



Data Set (III)

	2015	2016	2017	2018
Total Visits	314	1371	1416	1188



【青山学院大学との高大連携プログラム・

大使館レクチャー・シリーズ】

活動概要

【報告者】：田辺博史、藤井徹也(英語科)

【内容】：

本校3年生の内部進学がほぼ決定した時期に、青山学院大学国際センターが高大接続の一貫として3つのセッションを用意してくれている。一つめは青山学院大学の協定校留学制度を紹介し、留学のプロセスや体験談、資格の一つであるIELTSを紹介する「総合オリエンテーション」。二つめは国際センターと多くの関わりを持つ近隣の大使館よりゲストをお招きして行う「大使館レクチャー」(講義と質疑応答からなる)。三つめが卒業を前にした3年生にIELTSの連続講座(1週間)を提供する「IELTS講座」である。いずれのセッションもこれからの進路におけるグローバルな活躍の場を具体的に意識させるものとなっている。

【今後の展望】

3学期に行われるこの「留学オリエンテーション・大使館講座・IELTS講座」は、土曜日に行われている「学問入門講座」同様、本校の生徒たちがこれから取り組む大学での学びを彼ら自身と直接つなぎ合わせる、高大連携のプロトタイプであると言っていい。早いうちから大学関係者に高校生の興味や熱意を伝えられれば、進学したのちに彼らを選べる学びの幅やチャンスが広がっていく。今後とも十分なフィードバックをお返しし、有機的な接続を強めていけるように努めたい。グローバル社会における卒業生の活躍に資するものとなるよう、より強固な大学側との協力関係を築いていきたい。



◆青山学院大学協定校留学に関する総合オリエンテーション

【報告者】：藤井徹也(英語科)

【日程】：2019年1月9日 16:00～18:00

【場所】：青山学院高等部 大教室

【参加者】：1～3年有志 約88名

【講師】：青山学院大学国際交流課 柿沼亜耶、本校卒業生2名、ブリティッシュカウンシル講師

【目的】：

青山学院大学に内部進学した本校生徒が、協定校への留学を早めに意識して準備を始められるよう、大学時代に行う留学の意味合い・決定までのプロセス・協定校留学に関する理解を深めることを目的として行われる。また後半には協定校留学の資格の一つである IELTS について、デモレッシンを通し具体的なイメージを得る。

【内容】：

- 青山学院大学国際交流課からお招きした講師による、留学についての説明と事前準備等についてのレクチャーを行った。
- 大学での留学経験者でもある本校の卒業生による留学の志望動機から留学に至るまでのプロセス、現地での様子についてのプレゼンテーションを実施した。
- ブリティッシュカウンシル講師による IELTS に関する全体説明があった。
- ブリティッシュカウンシルの英国人講師による、スピーキングのセクションに焦点を絞ったミニレッシンを受講し、アイデアを広げるためのブレイン・ストーミングの練習やペアワークを行った。

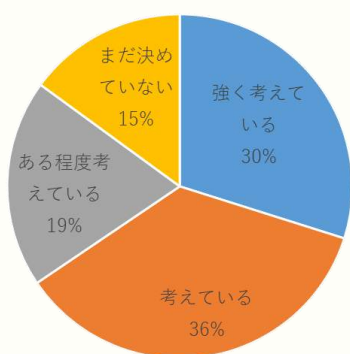


【検証】：

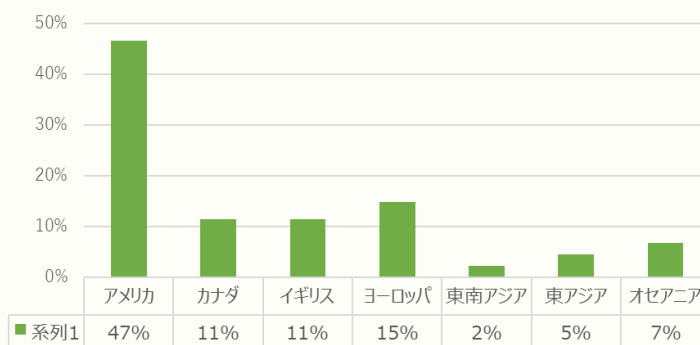
このプログラム実施後、参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

現時点で大学で1年間の留学に

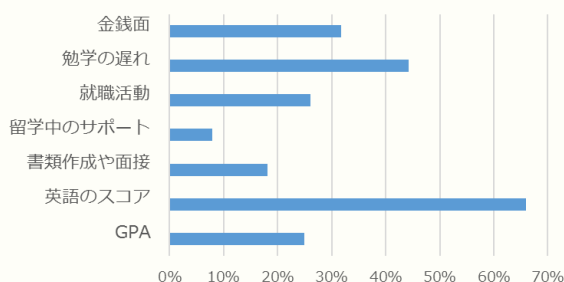
行くことについて



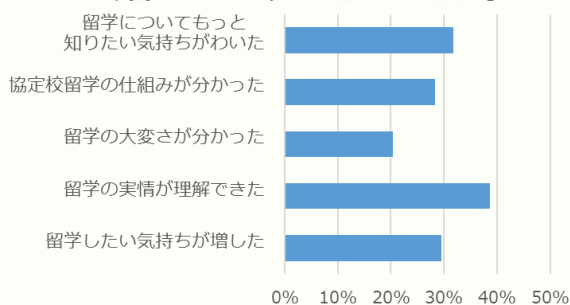
協定校留学に行くなら、どの地域に1番行きたいか



今回のオリエンテーションに参加して、
現時点で協定校留学の際に不安な点はどこか



今回のオリエンテーションに参加して



このセッションに参加する生徒たちのうち 6 割近くが、内部進学した際に大学時代の 4 年間のうちの 1 年を留学に充てたいと考えている。今回留学体験談を話してくれた卒業生も、本校に在学していた際にこの講座に参加して意欲を高め、大学 1 年生の秋に申し込みを行ったという。卒業して内部進学した卒業生の話に触発され、早い時期から留学を組み込んだ大学生活を考えていく良いサイクルができている。高大連携の一つの典型と言ってい。毎年 30 名程度の本校卒業生がこの協定校留学に合格している。英語のスコアに関しては不安を感じている生徒が多いが、4 技能テストの選別が本校英語科の中で進みつつあり、英語力の具体的なイメージが見えてくればその不安は目標に向かうエネルギーへと変わる。

◆カナダ大使館講座

【報告者】：藤井徹也(英語科教員)

【日程】：2019年1月15日 16:00～17:00

【場所】：青山学院高等部 大会議室

【参加者】：1～3年有志 47名 教職員 6名

【講師】：Christine Callahan 二等書記官

【目的】：

青山学院大学国際センターが本校の依頼に応じて、深い結びつきを持つ近隣の各国大使館から対象の国を選択してくれる。本校の学びの中心にもなっている「平和・共生」という趣旨に合わせて適切なテーマを選び、講師に依頼しお話しいただく。生徒たちは、その国の人々がどのように国をまとめ、周辺国との関係性を発展させ、共生を実現していくのかを学ぶことができる。

【内容】：

- テーマ「カナダの文化的多様性について」

- 連邦の結成まで
- 移民の歴史
- 男女平等
- LGBTIについて

※すべて英語で実施

- 参加生徒全員からの質疑応答

【生徒の声】：

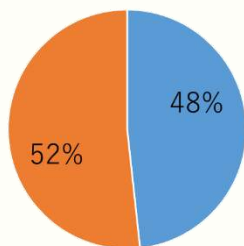
- カナダが多国籍だというイメージは全くなくて、人権問題に本当に真剣に向き合っている人々の熱意が伝わりました。日本には年齢の境目をなくす対策は沢山ありますが、もっと大きな目で見て、世界中の人々の境目をなくす事を目指していかなければならないと思います。移民が経済に貢献してくれる、などポジティブな考え方がとても素敵だと思いました。
- カナダはとても多様性があり、寛大だと、このお話を聞いて思いました、日本は移民の受け入れにあまり積極的でないのも、受け入れた時のマイナスな面にばかり目を向けていることに原因があるのではないかと考えました。実際、カナダで受け入れたことによって犯罪が増えていないことから、もう少し、最初から拒否するのではなく、良いところに注目するのが良いと思いました。

【検証】：

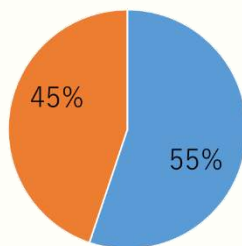
このプログラム実施後、参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

1. このプログラムに参加して共生社会について理解が深まった。
2. 将来、日本や海外で世界の様々な問題や状況につながって生きていきたいと思う。
3. 自分とは違う国や境遇の人たちの考え方を認めることは大切だと思う。

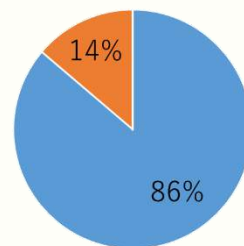
1.



2.



3.



■ 大いに当てはまる ■ ある程度当てはまる
■ あまり当てはまらない ■ 当てはまらない

カナダといえば移民国家の代表格であるが、そのアイデンティティを守るのに労苦を惜しまない姿を参加者に知ってもらおうという主旨の説明があった。また、移民に開かれた国家の様子を、「移民を入れることで経済が豊かになる」「移民の子供たちは必ず善良な市民に育っていく」ということを統計的に示すことで、説得力のある内容であった。他者を受け入れる姿勢は性的マイノリティに対しても同様であり、常に新しい社会状況に合わせて自国のアイデンティティを確保していく様子に、自らの視野を広げることができた生徒が多くいたようだった。終盤に会場から出された多くの質問にも丁寧に答えていただいた。その参加者の反応は書記官にも称賛をいただいた。



◆東ティモール大使館講座

【報告者】：藤井徹也(英語科教員)

【日程】：2019年1月16日 16:00～17:00

【場所】：青山学院高等部 大会議室

【参加者】：1～3年有志43名 教職員6名

【講師】：フィロメノ・アレシヨ・ダ・クルス特命全権大使

【目的】：前述の通り。

【内容】：

- トークテーマ「21世紀最初の独立国、東ティモールの描く未来」

※すべて英語で実施

- 参加生徒全員からの質疑応答

【生徒の声】：

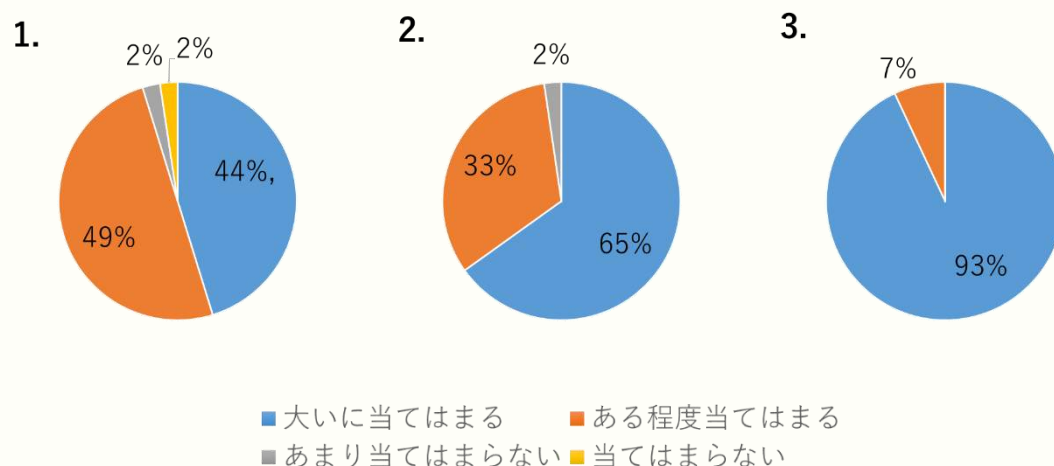
- 国境は国同士を分けるためではなく、つながるためにあるということ。今まで自分の中で国境は国をきっちり区別するものだと思っていたが、東ティモールが独立を経験したからこそ言える言葉だと感じた。
- 東ティモールについてはブルーペコの活動で知っていましたが、日本との関係や産業についてなど、新しく知ることができて良かったです。東ティモールの人たちは常に希望をもっているという国旗についての話はとても心に残りました。
- 東ティモールは貧しい国だから支援してあげなきゃ、というような考えがどこかにありましたが、東ティモールも1つの立派な国で、そこで皆普通に暮らしているのだと思いました。また「国境は国を分けるものではなく国と国をつなぐ接点である」という考え方が素晴らしいと思いました。



【検証】：

このプログラム実施後、参加生徒を対象としたアンケートを実施した。

1. このプログラムに参加して独立、平和について理解が深まった。
2. 将来、日本や海外で世界の様々な問題や状況につながって生きていきたいと思う。
3. 自分とは違う国や境遇の人たちの考え方を認めることは大切だと思う。



2年ぶり2回目となるアレイショ全権大使のご訪問をいただいた。この春に帰国されるとのこと。本校の生徒自主学習団体「ブルーペコ」が3年間に渡って東ティモールで学習活動を行っていることをご存じだった。経済を石油に頼っている現状だが、2030年には依存度ゼロにする目標を掲げている。また、陸・海・空に引かれた国境は国と国を分けるものではなく、つなぐものであり、新たな価値を作り出す場である、という概念など、新しい独立国にふさわしい哲学をわかりやすく披露していただいた。終盤に参加者から出された様々な質問に、終始にこやかにお答えになっていたのが印象的であった。なお、東ティモールは本校にとって、引き続き支援の対象であり、研究の対象でもある。SGH指定終了後もこのつながりを大切にしていきたいと考えている。



【2019 年度の展開】

東ティモールへのスタディツアー・宮古への訪問・English Camp、またそれ以前から行われてきたフィリピン訪問プログラム・イギリスやイタリアの提携校とのプログラムなどが、SGH 指定の下でさらなる広がりを見せ、学びの可能性がますます深まりを見せてきた。これらの訪問先と本校との繋がりはかなり堅固なものであり、いわば「定点観測」型の学びを可能にしている。前回までの学びを情報として知った者が自らの直接的な体験を求めて参加する場合がほとんどであるが、それらの新しい参加者の体験を彼らが固有のものとして学校に持ち帰ってくることで、常に新鮮な学びの結果がもたらされている。SGH 指定最終年度を迎えるにあたってこの「定点観測」型の学びを整理し、探求学習の一部としていけるよう議論の場を持っていきたい。

上記のスタディツアーに参加する者の人数は限定されており、二次体験者の出現を期待する体制を進めてきたが、この4年間で「二次体験」の定義を改める必要があることに思い至った。従来の、体験者の感動や意見に同意することにとどまらず、友人の気づきに共鳴し、自分自身の体験の場を模索して実際に活動を始める段階に達して初めて「二次体験」と呼ぶにふさわしい状態となる。

自然な心理的欲求として主体的・積極的な探究活動が生まれるような状況を作り出すべく、いくつかの試みを行ってきた。グローバルショーケースや生徒の学びの場・発表の場を多く設けることなどであるが、このような試みを重ねることで、生徒が全校を前に発表をすることについて教員・生徒それぞれの間に違和感がなくなってきたことは、この一年間の大きな変化である。校風を乱すような大きな変革は危険であるが、学校としての目標を定めて少しずつ前進していくことは可能であるという手ごたえを得た。来年度末には SGH 指定が終了するという事実を踏まえ、探求学習を中心に自走体制を整えつつあるが、この4年間で蓄積してきた学びの流れは「探究」を含む教科や科目での学びへと波及するに十分なもので、2020 年度のカリキュラム改訂を有利に行える状況を生み出している。

今後は聖書の教えに基づく「共生」マインドを基盤として自ら問題を探し、課題を設定し、解決を図る姿勢を養っていく。現在のところ、3年生の3学期にテーマごとのグループに分かれ、青山学院大学教授の指導を仰ぎながら最終的にはグループプレゼンテーションの場を設けて集大成とする、という案を検討中である。

平和共生 LogBook と e ポートフォリオ

ルーブリーフを綴じこんでいく「平和共生 LogBook」とe ポートフォリオとの棲み分けも、解決しなければならない次年度の課題である。具体的な学びの題材に近い前者とメタ認知力を培う後者を併用していく状況が続く。本校においては後発となるe ポートフォリオ使用については、作業の核心が理解されづらい。「振り返る」ことで何に「気

づき」を求めているのか、教師にも生徒にも十分に伝わっていなかった。来年度1年間で、使用精度を上げるために専門家を呼んで指導を行っていきたい。一方で、高大接続においてeポートフォリオがどのように利用されるか、判然としていない現状がある。そうした実利面でのメリットを抜きにしても、純粋にメタ認知力の大切さが理解されるようにしていく必要がある。

また、本校においては授業で用いる教材配布・作品回収プラットフォームについて、従来使用されてきた CoursePower から Google Chrome への変更が決定し、次年度は新しいカリキュラムの授業内で使用するための模索が始まる。2020 年度入学の学年から、順次生徒にタブレットが配布されることに合わせて、探究活動においても活用することが期待されている。

青山学院大学とのより有機的な高大接続

LogBook の活動にしろ論文にしろ、担当する教員の負担が取り沙汰されてきたが、新しいカリキュラムへの移行に乗じて、相応しい布陣をもって臨みたい。SGH 最終年度に青山学院大学との提携を次のようにできればと考えている。

- * 各学部の教授による、課題解決の際の学問的視点の教示。
- * ボランティアセンターによる、サービ斯拉ーニングの枠組みの提供。
- * アカデミックライティングセンターによる、論文執筆に関するオリエンテーションと個別質問への対応。

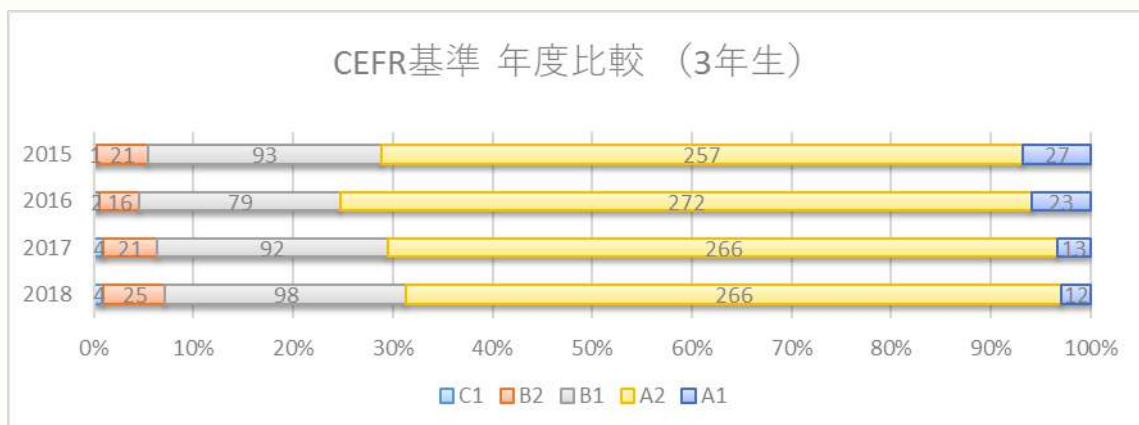
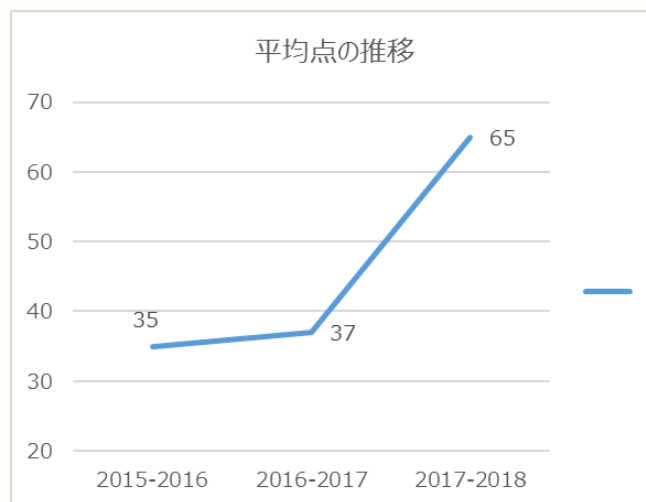
国際センター、地球社会共生学部との連携は今までと同様とし、上記を確認しながら、SGH 指定終了後も学びにおける高大の繋がりが維持できる基礎を築く1年間としたい。

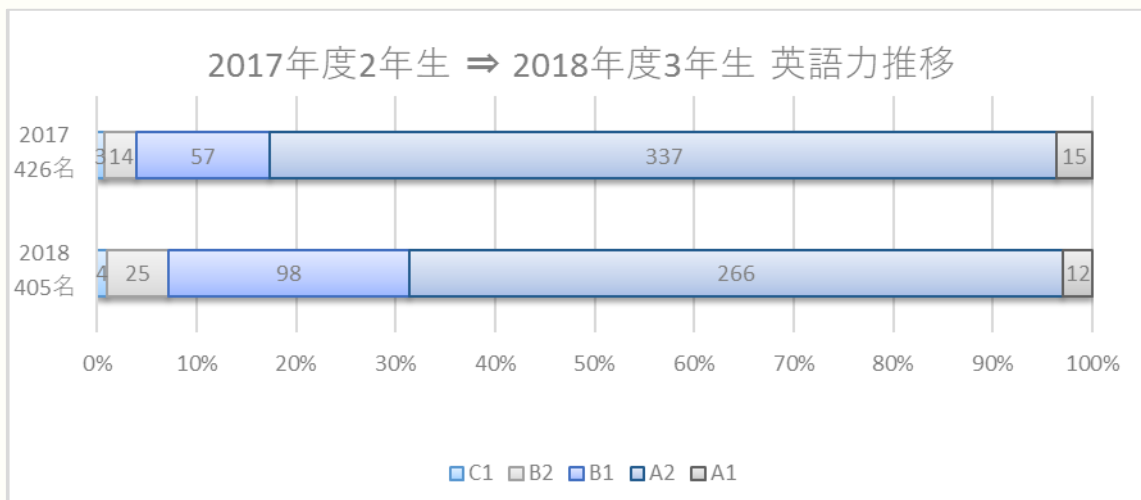
英語力の推移

【CEFR】

2015 年度			2016 年度			2017 年度			2018 年度		
学年	CEFR	人数	学年	CEFR	人数	学年	CEFR	人数	学年	CEFR	人数
3 年 399 名	C1	1	3 年 392 名	C1	2	3 年 396 名	C1	4	3 年 405 名	C1	4
	B2	21		B2	16		B2	21		B2	25
	B1	93		B1	79		B1	92		B1	98
	A2	257		A2	272		A2	266		A2	266
	A1	27		A1	23		A1	13		A1	12
2 年 401 名	C1	2	2 年 411 名	C1	1	2 年 426 名	C1	3	2 年 400 名	C1	1
	B2	12		B2	12		B2	14		B2	18
	B1	54		B1	55		B1	57		B1	56
	A2	302		A2	331		A2	337		A2	309
	A1	31		A1	12		A1	15		A1	16
平均点 414			平均点 449			平均点 468			平均点 489		

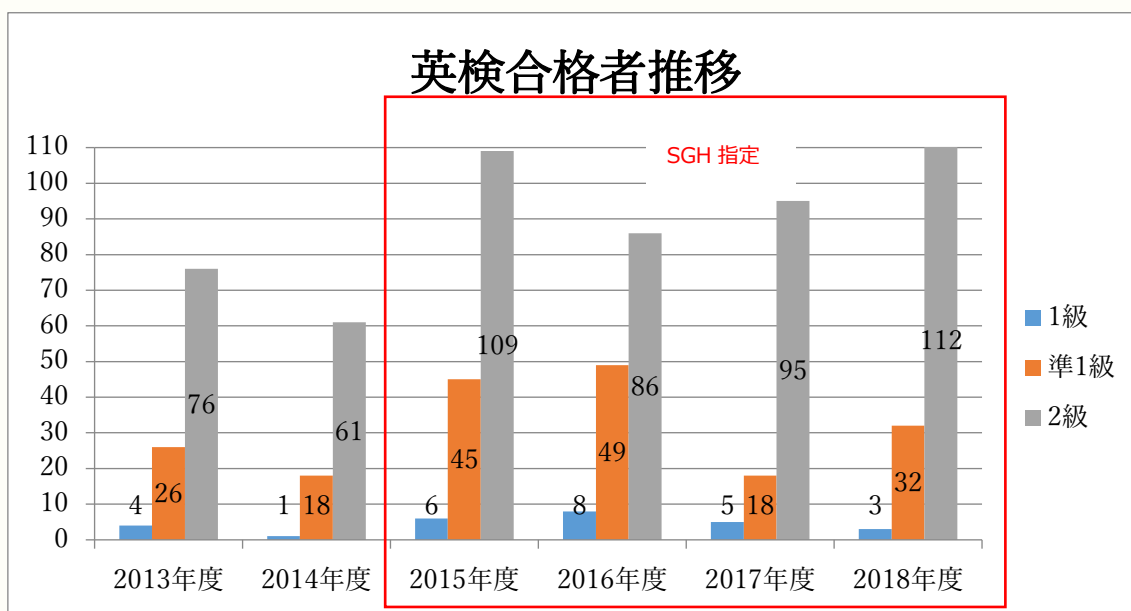
TOEIC 平均点の推移		
2015-2016	414-449	35 点
2016-2017	431-468	37 点
2017-2018	424-489	65 点
		UP





【英検合格者数】

	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度
1 級	4	1	6	8	5	3
準 1 級	26	18	45	49	18	32
2 級	76	61	109	86	95	112



【TOEIC・英検の結果と次年度以降の計画】

毎年1年生が TOEIC ブリッジ、2, 3 年生が TOEIC を受験する。昨年度までは4月の始業式直後に実施していたが、本年度からは1学期末へと変更した。その3か月間の伸び

が今回の平均点アップにどの程度影響しているのかを、来年度を待って検証してみたい。2年生と3年生の平均点の差を年度ごとに比べたときに、3年生の伸びが著しいのは、生徒の英語に対する意識の変化によるところが大きい。

英検に関しては、17年度の2回目が修学旅行と重なったため受験者が減少したが、本年度には例年並みに戻った。

英語科ではスピーキング・ライティングを含んだ公的試験の導入も検討し始めている。最終的にいくつかのテストに絞り込み、それに向けての指導に入っていきたいが、価格もかなり高いので、AIを使ったリーズナブルなものを提供し始めるまではなかなか特定の試験を勧められないでいるのが現状である。

平成 30 年度末アンケート

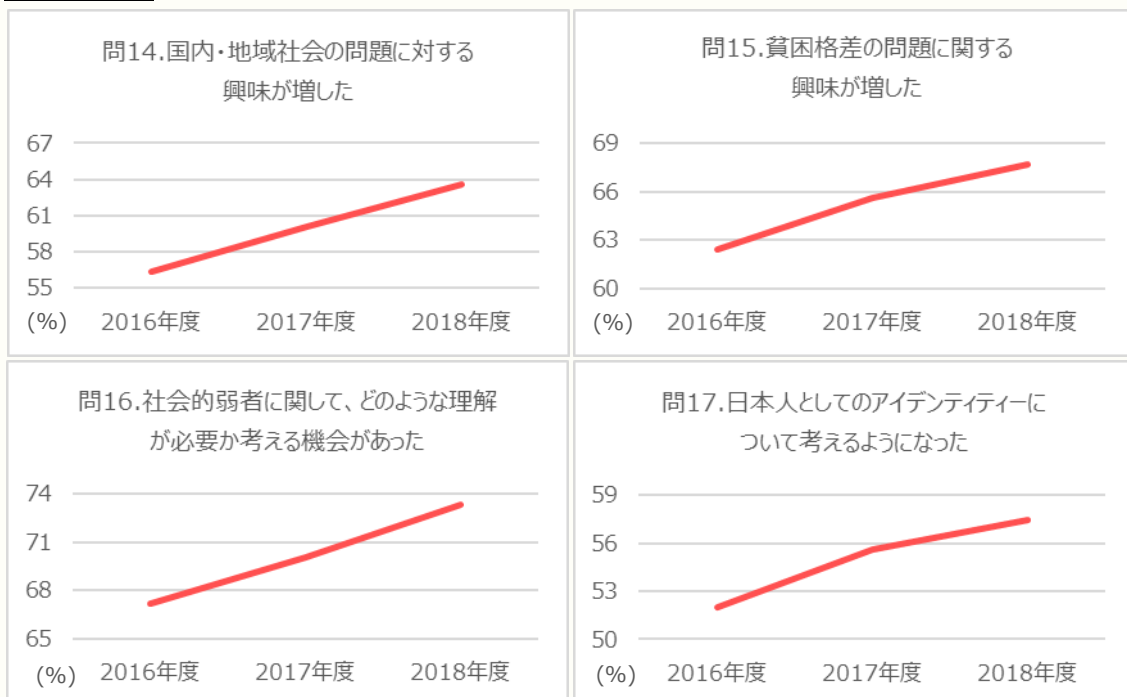
「グローバル社会・学習者としての自己認識に関する調査」として、2019 年 1 月、全学年対象のアンケートを実施した。

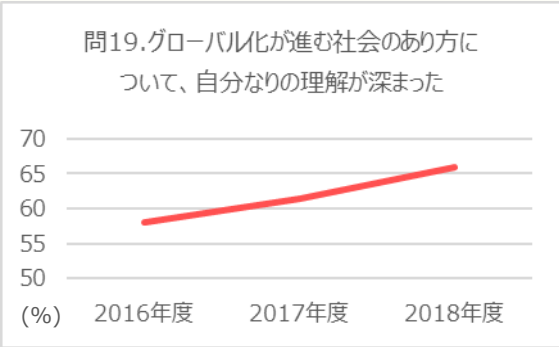
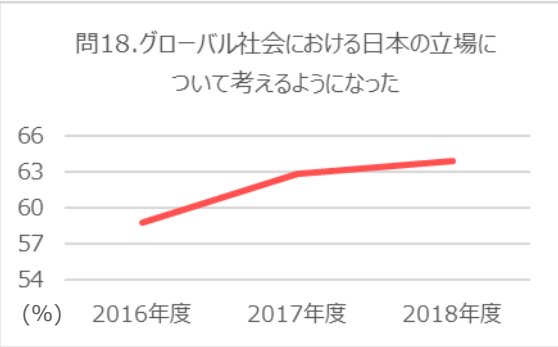
2016～2018 年 ポジティブな回答をまとめ 在籍年度ごとの生徒全体平均から算出した割合の推移



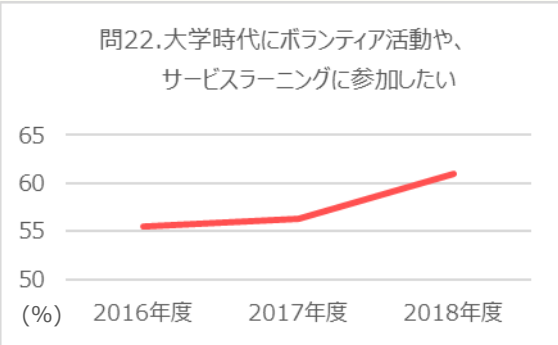


社会と自分

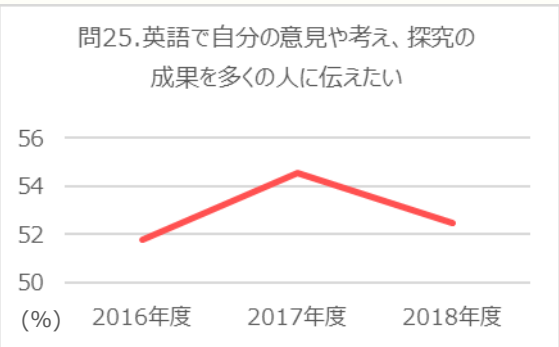


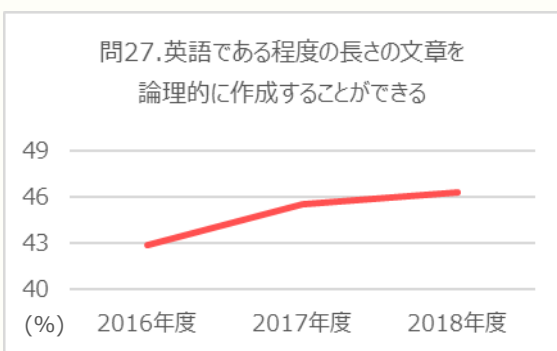
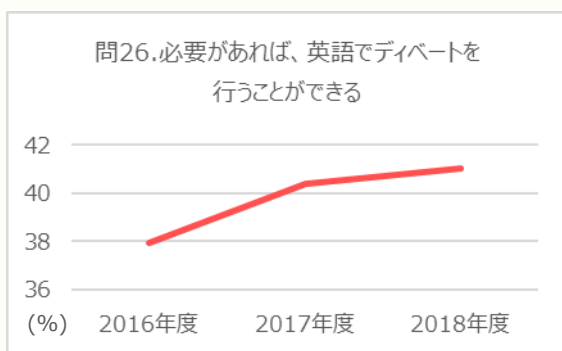


サーバントマインド

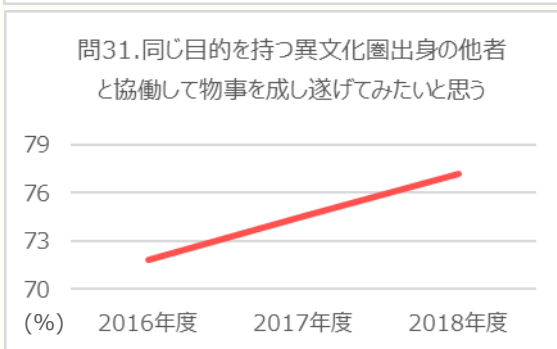
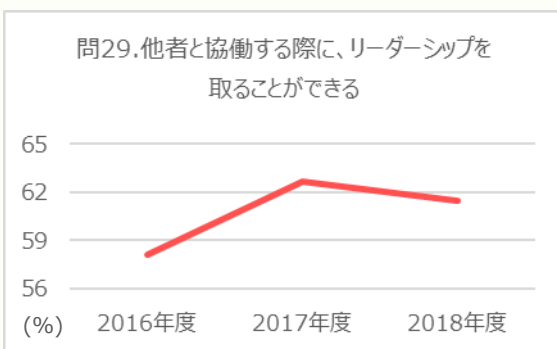


英語力について



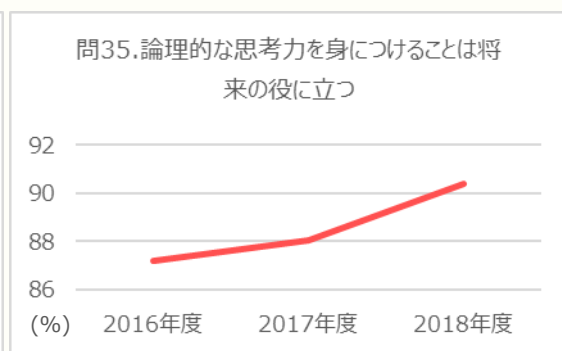
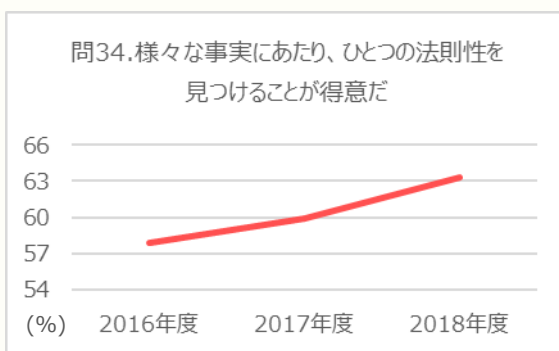


他者と協働する力

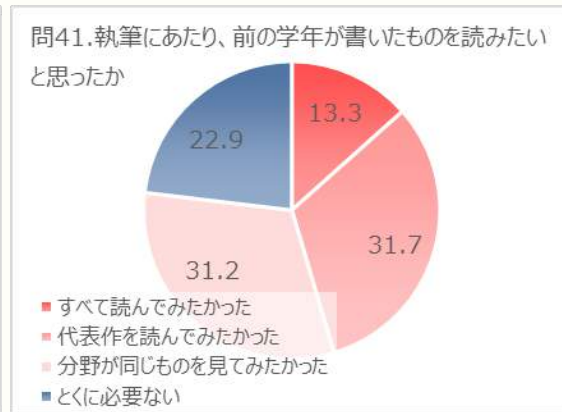
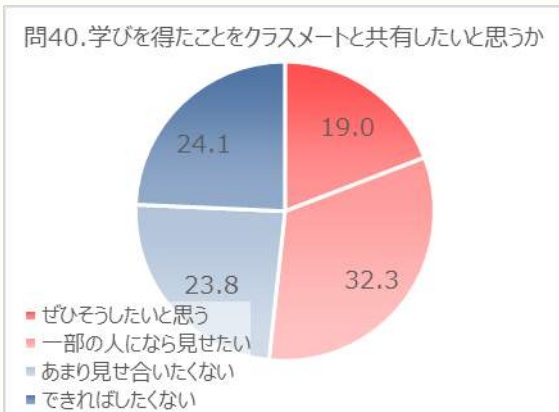
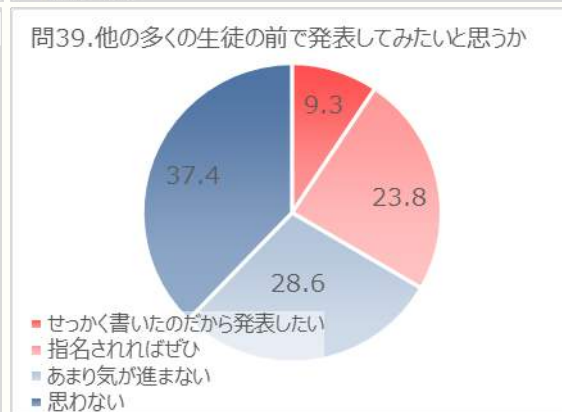
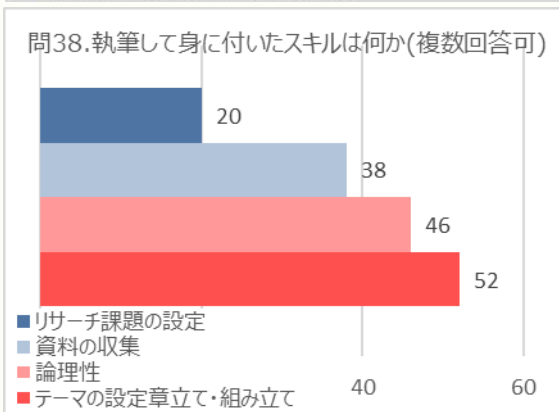
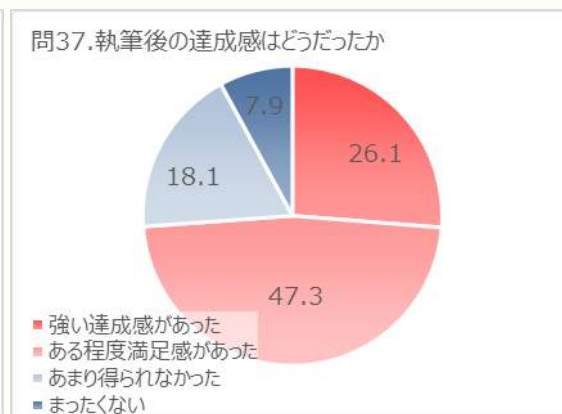
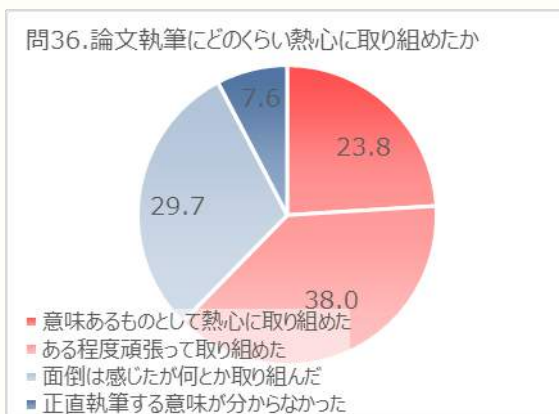


論理的な思考力

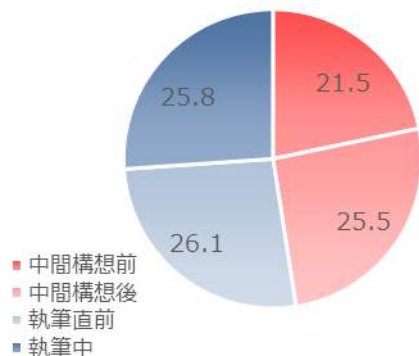




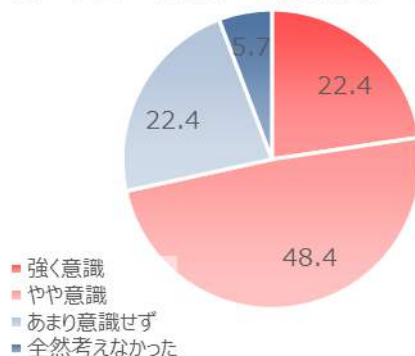
平和共生論文について(2018年度3年生)



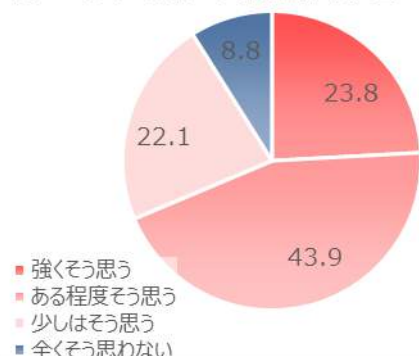
問42.執筆中、どのタイミングで助言を必要としたか



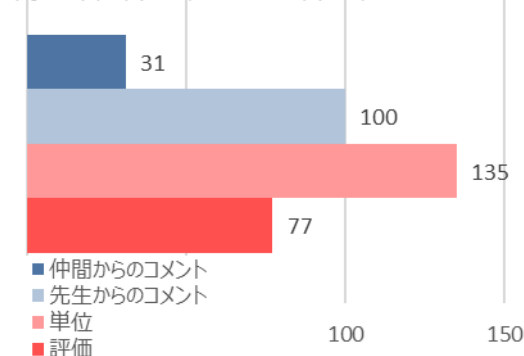
問43.共生という概念をどの程度意識して書いたか



問44.今回の体験は卒業以降に役に立つ

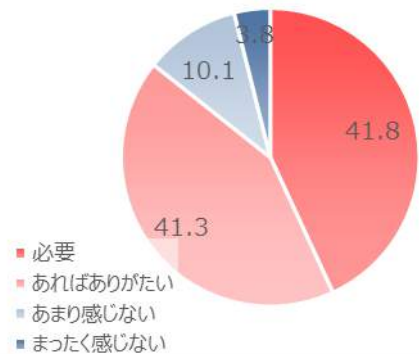


問45.書き終えて、ほしいのは次のどれか

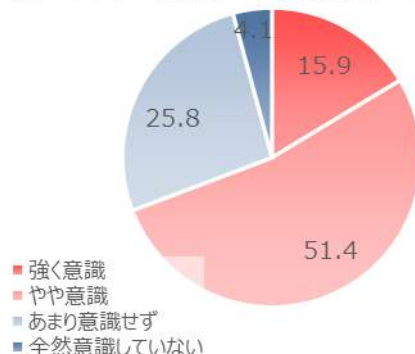


平和共生論文について(2年生)

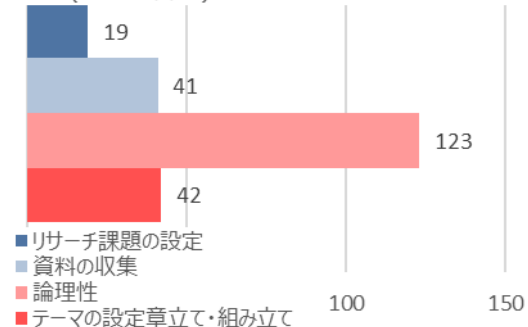
問46.中間構想の時点で、助言は必要だと感じるか



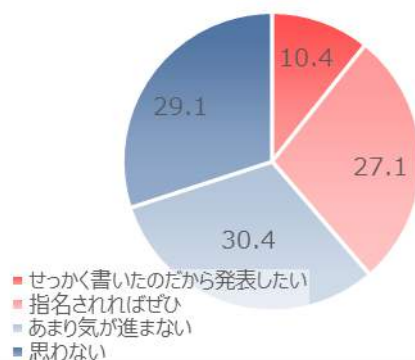
問47.共生という概念をどの程度意識して書いているか

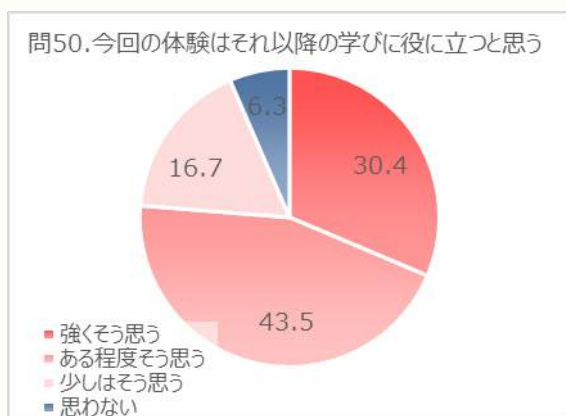


問48.論文作成で身に着けたいスキルはどれか
(複数回答可)



問49.作成後は発表してみたいと思うか





平成 30 年度末アンケート結果の分析

[検証項目 1.「サーバントマインド」の理解]<問 1～4>

SGH オリエンテーションやグローバルウィークのような行事は、生徒の SGH に対する興味・関心を確実にとらえてきている。本校が生徒に何を教え、考えてもらおうとしているのか、伝わりつつあることが実感できる。

[検証項目 2.「サーバントマインド」の体現]<問 6,15,16,20～23>

自分の未来像を考えるとときに「社会貢献」がキーワードになる、と答える生徒は毎年増加傾向にある。貧困格差や社会的弱者への理解も順調に伸びているが、これは「それらの問題に関して考える機会があった」と答える生徒の数が伸びていること、それが効果的に生徒に働いていることを証明している。社会に出る前の大学在学中にボランティア活動やサービスラーニングに参加したいと考える生徒数も右肩上がりが続き、意識や行動が変容しつつある様相を見てとれる。

[検証項目 3.グローバル社会の理解]<問 17～19>

グローバル社会における自己の在り方や、日本人のアイデンティティを考えるようになった生徒の数も 3 年間増え続けている。全生徒による「平和共生論文」の執筆活動や仲間の発表を聞く機会が増えてきたのも、大きな動機となっていると考えられる。それらが自分にとってどのような意味を持つのか、振り返りを交えて自問する機会が増えているのだろう。

[検証項目 4.ツールとしての英語使用]<問 24～27>

「英語でメディア情報に当たることができる」、「英語でディベートができる」、「英語の長文が作成できる」生徒の割合も確実に増加傾向にある。1、3 年に必修で置かれているネイティブ教員の熱心な指導の賜物であるといえる。枠組みと必要性があれば、英語を使うことにさほどためらいを感じない生徒が増えてきていることは、交換留学プログラムやホームステイプログラムでも実感されるところである。

[検証項目 5.グローバルキャリア志向]＜問 5,7,11,12＞

大学での留学を希望する生徒、海外大学を考えている生徒の数は減少傾向にある。原因ははっきりしないが、SGH プログラムが海外だけでなく国内の問題をも考える機会をたくさん作っているので、大学時代に留学せずとも取り組める学問の可能性に気付いた者が増えてきた可能性もある。一方で国際・グローバル系の学問分野は人気上昇しているので、大学時代に留学を決意する可能性は十分にある。

[検証項目 6.アカデミックスキルの獲得]＜問 32～35＞

3年間を通してみると、要旨把握、法則性の理解などの項目で順調な伸びをみせる。また、そうした思考スキルが将来に役立つと考えている生徒の数も増えてきた。論文執筆を通した指導が効果的にいきわたってきていることの証拠である。

[検証項目 7.多様性の受容と協働する力]＜問 28～31＞

「異文化圏出身の他者と協働して物事を成し遂げたい」と考えている生徒の割合が特に顕著な伸びを示している。青山学院大学へ来ている留学生と接する機会が増加していることとの関連は大きい。もとより様々な学校行事を主体的に行ってきた校風とこのことが混ざり合って、新しい学びへの土台を形成しつつあると見てよい。青山学院大学に進学していった者、特に国際系の学部に進学していった生徒の中に、集団の核を作ることができる者が多いという評価を得ていることとも関係がある。

平成 30 年度教育課程

教育課程表 (教科目配列表)

() 内の数字は単位数

	1 年	2 年	3 年
修得単位計	30	30	30
必修科目	聖 書 (1) 国 語 総 合 (4) 世 界 史 A (2) 数 学 I ・ A (5) (数学 I (3), 数学 A (2)) 生 物 基 礎 (2) 体 育 (2) 保 健 (2) コミュニケーション英語 I (3) 英 語 表 現 I (2) 家 庭 基 礎 (2) 社 会 と 情 報 (2)	聖 書 (1) 現 代 文 B (2) 日 本 史 A (2) (現代史) 現 代 社 会 (2) 数 学 II (5) 物 理 基 礎 (2) 体 育 (3) コミュニケーション英語 II (3) 英 語 表 現 II (2)	聖 書 (1) 現 代 文 B (3) 政 治 ・ 経 済 (3) 体 育 (2) コミュニケーション英語 III (3) 英 語 表 現 II (2)
(必修科目単位計)	(27)	(22)	(14)
選択科目	2単位1科目 音 楽 I 美 術 I 書 道 I 工 芸 I ※ 数 学 B (2) 数学 I ・ A 演 習 (2) 音 楽 I ・ II (2) 美 術 I ・ II (2) オーラル・コミュニケーション A (2) リ テ ラ チ ャ ー (2) 地 学 基 礎 (2) ★地学基礎は③のみ	セット選択 ① 化 学 基 礎 (3) 数 学 B (2) 標 準 古 典 (2) ② 化 学 基 礎 (3) 数 学 B (2) 物 理 I (2) ③ 化 学 基 礎 (3) 地 理 A (2) ※ (2) ④ 古 典 B (3) 地 学 基 礎 (2) 地 理 A (2) ⑤ 古 典 B (3) 地 学 基 礎 (2) ※ (2)	3単位3科目 古典 B (古文), 日本史 B, 世界史 B, 地理 B, 数学 III (α), 物理, 化学, 生物, 選択音楽, 選択美術, 上級英語 2単位3科目 聖書特講, 国語表現, 漢文, 文学史, 国語特講, 地理特講, 世界史特講 A, 世界史特講 B, 現代史特講, 日本史特講 A, 日本史特講 B, 現代社会特講 A, 現代社会特講 B, 数学 III (β), 数学演習 A, 数学演習 B, 数学基礎演習, 数学特講, 物理 I, 化学 I, 生物総合, 地学, 体育特講 A, 体育特講 B, 球技 A, 球技 B, 音楽 II・III, 美術立体, 美術平面, 書道 I・II, 工芸 I・II, オーラル・コミュニケーション B, メディア・イングリッシュ, リスニング・コンプレヘンション, 英語演習 B, フランス語, ドイツ語, 中国語, 韓国・朝鮮語, 被服基礎, 食物基礎, ICT活用探究実践
(選択科目単位計)	(2)	(7)	(15)
総合的な学習の時間	(1)	(1)	(1)
宗教活動 (礼拝)			
特別活動 (ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事)			

平和共生委員会通信「ともしび」



震災復興企画「アートでつながる壁画プロジェクト」
(宮古—室蘭航路就航記念) in 青山学院女子短期大学

ともしび 共生委員会ニュース

2018年度 1号

2018年5月21日版

共生委員会ニュース「ともしび」

スクールモットー「地の塩、世の光」

共生・校外学習委員会は平和や共生に関わる活動、修学旅行などを担当する教員の委員会です。原爆投下の地、長崎を訪れる2年生の修学旅行だけでなく、高等部の3年間の生活を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の問題を考えていきましょう。この共生委員会ニュースでは、様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声も他の多くの皆さんへ届けたいと思っています。その経験を共有し、一緒に考えるきっかけとして下さい。

高等部の平和共生教育

修学旅行、各教科の授業など3年間を通して平和と共生について学んでいきます。平和共生 LogBook に一人ひとり違った足跡を残しながら、考えていきましょう。

3年間の流れを紹介

1年生

- 聖書 杉原千畝の生き方を通して
- 国語総合 遠藤周作とアウシュビッツ・沈黙
- 英語 Playing the Enemy (人種差別政策アパルトヘイト撤廃後の南アラグビーワールドカップ)
- 生物 放射線被曝の影響

2年生

- 聖書 内村鑑三の生き方を通して
- 現代文 B 戦争に関するテーマ(内容未定)
- 日本史 A(現代史) 太平洋戦争、アウシュビッツ収容所、原爆の歴史

現代社会 日本国憲法第9条

英語 Life in a Jar

物理 原子力と核兵器

修学旅行 平和講話、長崎原爆資料館、キリシタン弾圧の歴史

3年生

- 聖書 M・L・King Jr 牧師の生き方を通して
- 現代文 共生に関するテーマ(内容未定)
- 英語 共生に関するテーマ(内容未定)
- 平和共生に関する個人論文作成

その他

グローバルウィーク、学問入門講座「共生と平和」、岩手県宮古市の高校との交流、フィリピン訪問プログラムなど

平和・共生に関する活動に興味がある人は、藤本、武藤、吉成、キャロル、ベリーまで声をかけてください。

私の使命

3 年男子

フィリピンから帰ってきて私は変わったと思う。実際に様々なことを知ってから私は自分の「使命」について考えるようになった。今まで使命についてあまり深く考えたり、感じたりすることはなかった。しかし今の私には使命があると気付いた。私の第一の使命は伝えることである。実際に現地に行ってみて、知ったのだから当然伝える義務があると思う。例えば、スラム街に住む人々にとっては汚い水でさえ貴重な資源で、お金を出さないと買えないという事実。私達からするとありえないことであると思うだろうが、現地の人はそうしないと生きていけないのだ。他には、いくら頭が良くて大学に行きたいという志が強くても、経済的に不可能という事例がほとんどということ。このように知ったのにそのまま伝えずしておくのは無責任だと思った。そこでこれらのことを伝えるために、二年生であった私は平和共生論文を使おうと決めた。本来は夏休みに決めて用意していた「憲法九条改正について」をテーマにして書くつもりでいたが、帰国後に本当に私が伝えたいことは「九条改正」ではなく「フィリピンの貧困」であると考えたからだ。また、高校生の今しか書けない論文であるとも思ったためテーマを変えた。そしてこの一年間をかけて更にこの論文を良くしていきたいと考えている。他には直接伝える手段も取っている。しかし、真剣に耳を傾けてくれる人が少なくかなり難航している。これからの目標はより多くの人に真の姿を伝えていくことだ。

そして次の使命は、常に知り続けるということである。この「知る」ということは支援においても重要である。重要である理由とは、何も知らずには適切な支援ができないはずだからである。例えば、相手が何を欲しているかも分からずに適切な物資を送ることはできない。また、それに加え現地の政治体制、法制度、情勢、経済状態を知っておくとよりよい支援につながると思う。ここで気を付けるのは、相手のことだけでなく自分のこともよく知っておく必要がある。「貧困」を生み出している原因に自分も関わっていて遠い国の問題として考えることのないようにするべきだからだ。そしてこの「知る」ということの最大のポイントは自分がまだ学生であるということだ。つまり、時間をかけて「知る」ことが出来るは学生の特権であるということだ。社会人になってからは十分に時間が取れないと思う。だから学ぶことが本業である学生の内に様々なことを知っておく必要があると思う。



旧ダスマリニャス スラム街の一角



そして最後の使命はかなり先の私の将来についてのことだ。今までの私の将来希望する職は国内の弁護士であったが、フィリピンから帰ってきて変わった。私は、国際的な弁護士として世界中の法で貧困問題にアプローチする者になると決意した。いつかはフィリピンへ戻り現地で子どもたちの明るい笑顔の為に働きたいと決めた。またフィリピン内にとどまらず様々な国の子どもたちのもとへ飛び回りたい。

このように、私はこのプログラムを通して自分の価値観を大きく変えられた。それだけでなく自分の人生をも変えてしまう大きなインパクトがあった。本やテレビからは絶対に分からない「貧困」の現状を知ることができるプログラムだった。

記憶を継ぐということ

3年女子

私は今月17日に、山の手空襲を語り継ぐ集いに参加してきました。この集いは、大半がご年配の方々に構成されていて、そこに私達のような青山学院の学生が加わって、山の手空襲についての本を朗読したり、経験談を語り合ったりする、というものです。そもそも山の手空襲とは、原宿や表参道に甚大な被害をもたらした空襲で、かつての青山学院もこれによって一部が焼失したそうです。

朗読する箇所の台本を最初に読んだ時、生々しい表現が多かったので、かなり狼狽しました。悲惨で残酷な空襲の事を文字だけで表現しようとしているのですから、いくら鮮烈に書いても足りない事くらいわかっていますが、やはりここまで鮮明に描写されると動揺せざるを得ませんでした。声に出さず、自分で黙読する分にはただ内容を理解しようとするだけで済むのですが、これを読んで、聞き手に伝えようとするとなると、あたかも自分の経験した事のように声に出して読まなければいけないので、実際に体験したわけでもない私にそんなことが出来るのか、だいたい戦争未経験者が偉そうに戦争を語っていいのか、不安と後ろめたさがありました。だからといって朗読できない、という訳にもいかないので、それなりに練習して私の中で一つ、答えのような読みを、なんとか見つけました。

当日、会に参加した時、そこに居たご高齢の方から、何度も何度も、青山の若い学生達が来てくれて、こうやって語り継いでくれる事が有難い、戦争について知ってくれてありがとう、という趣旨の事を、なにか吹っ切れたような一種の晴れ晴れとした諦観と希望とが入り混じった眼差しで言われたことがとても記憶に残っています。そのような事を言われて、しばらく考えて、根本的な問に対する答えに気づけたように思えました。戦争を経験した事もない私が経験談を朗読する意味、私たちがお年寄りの方々が体験したその悲惨な出来事を、知ろうとして、語り継いでいこう、というただそうするだけで充分だったのです。その気持ちこそがなにより彼ら、彼女らにとって一番嬉しいものだったのだと気づいた時、私はそれ以上に何も出来ない自分の無力さを省みながらも、しかしずっと心の中で渦を巻いていた困惑がスッパリ解けたような気がしました。このように、ただ交流をするだけでいいのです。会って、目を見て、会話をするだけでよかったということに気づかせてくれました。



Aoyama Second Chance の取り組みについて

3 年女子

私たち Aoyama Second Chance (ASC) は日本の食料問題について深く考え、少しでも解決に近づけられるよう取り組んでいる団体です。そもそも日本におけるそれほど重大な食料問題とは何なのか、皆さん想像がつかないと思います。しかし、実は日本人の約 6 人 1 人(約 2000 万人)が貧困線以下で暮らしている現状があります。そのうえ、日本の貧困率は年々上昇傾向にあるのです。このような現状がある一方で日本は食品ロス(本来食べられるにもかかわらず捨てられている食料)の問題も抱えています。実に日本国内では、年間の米の生産量(839 万トン)とほぼ同じ割合である 500~800 万トンもの食品ロスがあります。以上の 2 つの食糧問題の要因は様々で、日本の食料問題は深刻となっているのです。

そこで私たち ASC は、まだ食べられるのに様々な理由で処分されてしまう食品を、食べ物に困っている施設や人に届ける活動(フードバンク)によって食料が不足している部分と余っている部分との架け橋となる役割の手助けをしています。また、私たちがフードバンク活動をする上で参考になっているのが「セカンドハーベストジャパン(以下:セカンドハーベスト)」と言う日本で初めてフードバンクを始めた団体です。「セカンドハーベスト」は食品製造業者、卸店、輸入業者と提携し、余剰食料の寄付を促し、その食料の貯蔵や必要な人への配達をする、言わば「食の仲介人」のような役割を担っています。このような団体を参考にすることによって、私たちは今、何ができるかを考えています。

私たちはセカンドハーベストを参考、また、協力すべく、家庭から寄付できる加工食品を学校で集める活動(フードドライブ)を昨年実施し、この結果、22kg もの加工食品が集まりました。このフードドライブの活動は学校全体で食料問題に取り組むことができるため、今後も実施したいと考えています。

また、私たちは 7 月にセカンドハーベストが行なっている炊き出しに参加しました。この炊き出しは毎週土曜日に上野公園で路上生活されている方に 3 日ほどの食料と手作り弁当を渡すボランティアです。そこで私達はボランティアの大変さを身を以て体験しました。暑い中一人一人にお弁当を手渡しし、下準備から後片付けまで全て自分たちでやる大変さと自分はほんの少ししか役に立っていないという無力さ、でも確実に人の役に立っているという達成感で半日のボランティアはあっという間に終わりました。この日を境に私たちに与えられたボランティアが「簡単に手伝えそうな支援」から「微力ながらも人のためになる支援」へと変わりました。私たちは今後もセカンドハーベストが行なっている様々なボランティアに積極的に参加して行きます。

以上のフードバンクやフードドライブ活動、またセカンドハーベストのボランティアに参加してみたい高等部生を私たち ASC は常に募集しています！



2017 年度の活動の様子

東日本大震災から学んだこと

3 年女子

皆さんは2011年3月11日のことを覚えていますか？東日本大震災は、最大震度7の強い揺れと国内観測史上最大の津波を伴い、東北・関東地方を中心とする広い範囲に甚大な被害をもたらし、また日本各地で電話やメールが不通になるなど様々な混乱が起きたので、多くの人の記憶に残っていることでしょう。私たちは、7年半前の被災地の状況はメディアを通して知ることが出来ましたが、7年半経った今日ではメディアで取り上げられる機会も少なくなり、直接現地を訪れないと情報を得ることができません。私は、マスコミの報道を鵜呑みにするのではなく、この目で現在の宮古市を知りたいと思い宮古訪問プログラムに参加して3つのことを学びました。

1つ目は情報の不正確さです。気象庁が最初に出した警報の津波の高さは、岩手県は3メートルとされていましたが、実際には40メートルもの高さに及びました。宮古市の人々の多くはこんなにも高い波が町を襲うなど考えもしなかったことでしょう。私たちが今回訪れた宮古市田老地区は過去2度、明治と昭和に大きな地震と津波がありました。そのため、町には津波記念碑が建てられるなど、後世に津波の恐ろしさと避難の重要性を伝える取り組みや、交差点の隅を大きめに切り取ることで見通しを確保し、災害時に円滑な避難行動が出来るような取り組みがされていました。それでもなお、多くの方々が犠牲になったのは誤報を信じてしまったからだと思います。こうした情報が全て正しいという固定観念を持つことは、たいへん危険なことだと学びました。

2つ目は行動する力の大切さです。災害当時、日本中から支援物資が届きましたが、道路が封鎖されていたために避難場所まで物資を運ぶことが困難でした。しかし、そこで立ち上がったのは地元の中学生だったとお話をお聞きました。大人たちが災害に混乱する中、自分たちに何か出来ることはないかと自ら役場を訪れて活躍したそうです。何事も言葉で表すことは簡単ですが、実際に行動するには大きな勇気が必要です。私自身、被災地に訪れたいと思いながらも、今回訪れるまでに7年が経ってしまいました。しかし、もっと早く訪れていれば良かったと後悔しています。何か行動することに悩んでいる人は、一歩踏み出す勇気を出してもらいたいと思います。

最後の3つ目は復興の難しさです。目に見える建物などの物質的なものは復興が進んでいるように感じましたが、目に見えない心の面はまだ復興していないように思いました。私たちは、宮古市の集合住宅に住むお年寄りから、宮古北高校の同世代まで多くの人とお話しましたが、どなたも話が終わると「話を聞いてくれてありがとう」と、ただ話を聞いただけの私たちに感謝してくださいました。心の復興にはまだまだ長い月日が必要ですが、私たちに出来ることはたくさんあると思います。

私は、宮古訪問プログラムで多くのことを学びました。この話は私個人が宮古市について知って考えたことでしかありません。復興という大きな課題には日本中が取り組む必要があります。また、未来で多くの被災者が生まれないためにも後世へ伝えていかなければなりません。この問題について皆さんにも現地に足を運んで考えてもらいたいと思いました。



ボランティア部を振り返って ～やってみること～

3年女子

世の中には「やり損」という言葉があります。私も今まで何回か口にしたことがあります。この学校でボランティアをしていて、やり損より何倍も多く口にした言葉があります。それは、「やらない損・行かない損」という言葉です。「～ない」に損を付けてしまった言葉なのですが、今まで活動をしていてこの言葉をとても強く感じました。ボランティアという言葉を知ると、大変そう・面倒くさい・疲れる。などのイメージが出るかもしれません。そんなイメージから活動に消極的になってしまっている人も多いと思います。それこそ「やらない・行かない損」なんです。やらない・行かないから、現場でやった充実感や行った楽しさがわからないのです。そして「その充実感や楽しさを、実際に体験しないなんてどれだけ人生損をしているんだろう？」という思いでいつもこの言葉を使っていました。そんな大袈裟な。と思うかもしれませんが、本当にそう思っています。私はボランティア部の活動に参加して、「この世界にはまだまだ知らないことがたくさんあるんだ、いろいろな考えがあるんだ、いろいろな生き方があるんだ。」と感じました。目の前には新しいことばかり広がっていました。

例えば恵比寿で行われる『えびす青年教室』では、月に一度知的障害を持っている方々と様々な活動を行います。「障害を持つ持たないの壁を超えて同じ活動をする。」そこにはどこまでサポートをするべきか、どのようにコミュニケーションをとるべきか。そんなことを考える必要があったりします。また、みなさん十人十色でそれぞれの仕事をし、好き嫌いや、考えがあります。障害を持つ方と同じ時間を過ごす。私が一番影響させられた活動です。そして横浜市の寿町で行われる路上生活者に向けた炊き出しでは、路上生活者(ホームレス)問題についてとても考えさせられました。

そんな世界にもっとたくさん行きたい、学びたい。と思い、何度も部の活動に参加するようになりました。この3年間の私の経験は大きな財産となりました。何もしないでいたら、私は何も得ることができないまま無駄な3年間を過ごしていたと思います。行動を起こすようになったからこそ今の私があります。

もう一つ、行ったからこそわかったことがあります。それは、人との交流です。みなさんボランティアの「活動」にばかり目がいていませんか？活動をするにはそれを運営する人がいるし、他に参加する人もいて、たくさんの方が関わって成り立っています。そんな人たちと顔見知りになりいろいろな話をするようになるのは、すごく楽しいし、私が活動に興味を持った要因の一つでもあります。ただ「活動」が大変そうなどではなく「人」が関わっているものだということを知ってほしいです。

しかし私たちの活動は運営する方々がつくった土台の上で踊っているようなものです。高校生の活動なんてそんなものかもしれません。でもこれでボランティアを知れたと思うのはとても甘い話だと思います。世界には様々な問題があります。書き損じハガキや古切手を集めることでアジアの貧困のための支援につながったり、今年は西日本豪雨や北海道胆振東部地震の募金を行ったりとボランティア部でも活動をしています。それは世界の問題のほんの一握りです。最後まで読んでくれたみなさんもまずは身近なことから動いてみて、ボランティアに興味を持って頂けたら嬉しいです。



東ティモール訪問プログラム

3年男子

《レテフォホ 小学校訪問》

レテフォホで迎えた初めての朝は少し息苦しかった。標高が高く、酸素が薄かったからだろうと思う。朝食を終えた私達は車に乗り、軽いジェットコースターコースの様な坂、隣は崖、という道を通り、地元の小学校へと向かった。

車から降りて辺りを見渡すと子供達がいた。私達は日本から持ち込んだ「かるた」を出した。このかるたは渡航前に私達が制作した物で、無地のかるたにイラストを描き、読み札に日本語、英語、テトゥン語での読み方を記載した、東ティモールバージョンだ。早速、地面に絵札を広げて実演して見せた。見ていた子供達はすぐにルールを理解し、次々と絵札の周りにしゃがみこみ、かるたで遊ぶようになった。

帰るときには子供達も大人達も皆最後まで手を振ってくれていて、私は最後までその姿を見続けた。何よりも記憶に残っているのは彼等が東ティモールの国歌を歌ってくれたことだった。帰国してから、動画サイトにて日本語訳付きの東ティモールの国歌を聴いてみたら、自由、土地、国を大事にする歌詞にとっても感動した。この感動は一週間を東ティモールで過ごしたからこそのものであると思う。

私が東ティモールのことを好きになったのは、現地の人々の優しさや親しみに触れたからかもしれない。東ティモールは過去に外国によって被害を受けたことがあったにも関わらず、なぜこのような穏やかな性格を持っているのだろうかと思った。私は人々のことをただ見るだけでなく、“知る”ために、より一層東ティモールの人々に近付きたいと自然に思った。これで私がどうして帰国時にティモールっ子になっていたのか、わかってもらえたのではないだろうか。もしまだ理解できなければ、是非一度東ティモールを訪れて欲しい。美しい景色、活気のある市場、そして素晴らしい人々に出会う事で、きっとこの理由がわかるはずだ。

(SGH プログラム 東ティモール訪問プログラム報告書より抜粋)



スーパーグローバルハイスクール
青山学院高等部
2018 年度 事業報告書

発行日：2019 年 3 月

発行者：青山学院高等部 SGH 委員会

Tel: 03-3409-3880 Fax: 03-3409-5784

<http://www.SGH.agh.aoyama.ed.jp>